

金陵會議
一各四國會議

215
350

215-350
1200701750054



215
350

宮地美彦編著

金陵及會議
議
一、四國會議

全



緒言

本書題シテ金陵會議一名四國會議ト云フ。明治二年ヨリ四國十三藩



が讚岐ノ金毘羅ニ會議所ヲ設ケテ此所其各藩ヨリ選出セル議員ヲ召集シ國家ノ爲ニ議會ヲ開キタル事ノ始末ヲ詳細ニ説述シタリ。唯從未顧テ



六拾餘年前ノコノ幼稚ナ地方的議會ト未曾有ノ非常時ト称シテ居ル近年ノ進歩セル帝國議會トフ比較對照シテ特ニ其時代々々ノ議員ノ精神的實質ノ點ハ如何ニ變遷シテ居ルカ。憲法發布前金陵會議ハ各藩選出ノ議員ハ憂國ノ士人撰ノ事。格式ニ重ヲオカス人オモシ



ズベキコト等ト規則ニアルガ、今日ノ代議士ハドンナ人デアルカ、吾々ノ立派ナ國士ガト思ツテ選出シタ人ヲ隨分眼鏡ノ邊ツク不義者ガ出タコトハ無カ、思フテ此所ニ至ル時吾セハ立憲國民トシテ恥ツル所ハナイカ。非常時ト称スル今日ニ於テ國民ハ拳ツテ至誠報國ノ本心ニ立戻ラナケレバナラヌデハナイカ。則此等反省ノ資ニ供セントスルモノデアル。

前ニ出版セルモノヲ増補訂正シテ今第二版ヲ出スニ當リ、本書ノ為ニ有益ナル資料ヲ提供シ或ハ多大ノ援助ヲ與ヘラレタ別記諸氏ニ對シ、茲ニ謹テ謝意ヲ表シマス。

昭和九年九月二十九日

著者 識

例言

一、本書ハ題シテ金陵會議一名四國會議トス。記事中心ハ四國會議トモ金陵會議トモ書シ用法一定セズ時ト所ニヨリ便宜混用セリ。蓋シ元來ハ四國會議ニシテ後會議ノ地ガ琴平ナルニヨリ(琴平又ハ金陵ハ琴平ノ別称)世人多ク金陵會議ト称シ而者全ク一ニシテナラザルヨリ筆ニ任セテ金陵又ハ四國ト書キシマデニテ別意アリ然カセルニ非ラス。本文中ニ阿波淡路ヲ阿波藩又ハ德島藩ト書シ土佐ヲ土佐藩又ハ高知藩ト書セリ。正シクハ維新前ト維新後トニヨリ称呼ニモ区別スベキコトアルベシト雖モ本書ハ明治維新後ノ德島藩高知藩ハ何レモ維新前ノ阿波藩土佐藩ト結局全一所ナレバ之亦各兩藩名ヲ混用セリ。決シテ其何レノ称呼ニヨルモ別意ナキコトヲ事割リ置ク。

一、記事中心(宇野氏ニヨリ)如ク記セルハ宇野東風氏ノ報告示教ニヨルコトヲ畧記セルモノニシテ其他之ニ類スル記載ハ皆之ニ準ズ。依テ卷末ノ参考文献ノ條ト参照諒解セラレタシ。

一、附録ノ關係人物ハ主トシテ余ノ郷土人物ヲ簡單ニ説明シタルモノニシテ他藩ノ分ハ判明セルニヨリ添ヘタリ。他日關係者全部ノ略歴ヲ纏メタキ考デアル。

一、本書ハ資料ニシク且ツ著者ノ研究足ラズ所謂杜撰千萬ナル小冊子

本年二月第一版ヲ出シ、關係郷土史家ト歴史専門ノ大家、閱覽
 二供シ、以テ本書ノ不備誤謬ノ批正ヲ乞ヒ、今一般希望者ノ懇望ニ
 リ、多少補正再版ニ附シ、廣ク頒ツテ斯道ノ参考ニ供シ、他日ニ其訂正
 完備ヲ期スル次第ナル。

昭和九年九月

著者再識

金陵會議及四國會議

目次

第一	我が國ノ議會	1
第二	四國會議	7
第三	四國會議ノ發起	10
第四	土佐藩ノ誘説	19
第五	四國會議ノ建置ノ趣意	23
第六	第一回ノ四國會議(九龍會議)	42
第七	金陵會議	49
第八	金陵會議ノ規則	62
第九	金陵會議ノ議事ノ項	66
第十	金陵會議ト他藩トノ交渉	80
第十一	金陵會議ノ規則ヲ改定ノ議ト金陵會議所ノ廢止	89

附録

一、關係人物ニ就テ
 二、参考史料

附一
附二

金陵會議 一名四國會議

宮地美彦 著

第一 我が國ノ議會

抑モ我が國ニ於テ議會ト云フコトハ、西洋舶来ノ譯語デ、極ク新シイ言葉



ヲ有スルモノナルガ、議會其ノ物ハ決シテ舶来物デハナイ。純國産ノ最モ古イ歴史
テアル。ソレデハ其最モ古イ議會ハ何ンデアルカト云ヘバ、
彼ノ有名ナ神代ノ天照皇太神ノ天岩戸隱レ、時、群神ガ天安
河原ニ神集リマシテ事議リ給ヒシ事デ、即八百萬神ガ御集ツマリ遊バ

シマシテ皇太神ノ天岩戸隱レニヨリ暗黒トナリタル此ノ世界ヲ如何ニナシテ又
安泰和樂ノ光明世界ニ復ヘスベキカト神議ヒ議リ給ヒテ、其結果ガ天岩
戸開キトナリ、宇内ノ物ミナ廣大無量ノ皇化ニ浴シタノデアル。次デ又高天原

會議が開催セラレテ、今度ハ素盞男命ノ罪ヲ定メ出雲國へ追ヒ降シ給
フタノデアル。此等高天原會議ハ取りモナホサズ、今日ノ議會デアル。爾來今日
ニ至ルマデ實ニ數千年ノ間我が國ニ大小幾多ノ議會ハ繰返サレタ事デ
アラウ。

然シ世運ノ隆替ニ伴ヒ、議會ノ多ク用ヒラル、ト否トノ別ヲ生ジ。後世武
門政治ノ盛ナル時ニハ國初高天原會議ノ如キ神聖ニシテ開放的ナ會議
ハ殷々ニ廢止セラレテ仕舞ツタ。又此ノ時代ニハ武家ノ專制政治デ斯様
ニ議會ナドノ必要モ認メナカツタ。稀ニハ極少数ノ相近キ階級ノ者等が
相寄ツテ事ヲ議スル程度ノ事ハ行ハレタノデアル。

茲デ事割ツテ置クコトハ、私ノ議會ト申シ来ツタノハ、私的ノ談話集會
等ノ意味デハナク。公的ニ政治經濟其他ノ議事集會ヲ指シテ云フノデ
以下亦此ノ意味ニテ記述スル。

扱テ徳川時代ニハ如何デアルカト云ヘバ、此ノ時代ハ次第ニ昌平日久シク
上下共ニ長夜ノ夢ヲミテ、事ナカレ主義ヲトリ、益々文弱遊惰ニ流レ。特權階
級ノ一部ノ者が封建政治ヲ行ツテ居タ故ニ、衆議機關ヲ設ケテ之ニヨツ
テ政治ヲ行ウト云フ様ナ機會モ至ツテ少ク。會議トカ議會トカ云フ言葉
ハ余リ用ヒラレナカツラシイ。從ツテ明治大正ヨリ昭和ノ今日ニ至ルマ

テ一般ニ議會トハ帝國議會ノコトデ、ソレ以前ニハ扱ガ國ニ議會ナルモノナシ
ト考ヘラレ。甚ダシキニ至ツテハ帝國議會ノ設立ガ我國ノ議會ノ創マリ、議
（二文オ）

會トカ會議トカエテ、語ハ極ク新シキ言世ホテアルト感違ヘスル者ガアル様、サ
ツタ誤デモアラウカ。然レモ今少シ德川幕府ノ末期カラ明治初期ノ歴
史ニ注意シテ見ルト、直ニ議會ナルモノガ新船来モノテナクテ。純國產物タル
コトニ首肯セラレルデアロウ。即チ德川氏ノ幕末、專制政治ノ衰微ト共ニ
ソロソロト議會ヨルモノガ頭擡シ来リ、明治維新後ニハ其レガ段々勢力ヲ白メ
ルニ至ツタ。

今少シ具體的ニ云ヘバ、幕末ノ内憂外患交々至ツテ國家益々多事ナルニ
際シ、幕府ハ之ガ所置ニ窮シテ、無止先例ヲ破ツテ、可成知ラシメズ言ハシメ
ザツタ大小諸侯ヲ初メ、旗下ノ士ヲ城中ニ會シテ、懇口ニ國事善處ノ策
ヲ諮ツタ、此種ノ會議相續テ數回ニ及ビ、又 朝廷ニ於テモ、當時德川幕府ノ

優柔不斷、政兵ノ行ハレザルヲ以テ公卿諸侯ヲ召シ、或ハ諸藩ノ有志ヲ召シ、至
國事ヲ諮問討議セシメ給ヒシコト數度デアツタ。斯クテ各藩ニ於テモト
下諸士ヲ會シテ衆智ヲ協セ、緊急時事ヲ議セシメタ。以上ノ如キ會議ハ夫
々一種ノ議會デアアル。

明治維新ノ政ガ行ハレル様ニナルト、益々議會ハ盛ニ行ハレタ。先ヅ明治ニ
元年正月(慶應四年) 朝廷ニ於テハ徵士ヤ貢士ノ制ヲ定メテ議事所ヲ創設
シタ。コノ議事所ハ後ニ公議所、集議院、待詔局、待詔院等トナツテ、順次名稱
組織、職制等ニ變遷ハアツタガ、要スルニ此等ハ立派ナ議會デアツタ。又各
藩(維新前後縣ニルマデ藩名ヲ存シ藩知事ヲ任命セリ)ニ於テモ明治二三年頃カラ
藩治職制ニ則リ、議會ヲ起シテ、藩治ノ事ヲ議シタ。其名稱ハ議事方、議事所、
藩治職制ニ則リ、議會ヲ起シテ、藩治ノ事ヲ議シタ。其名稱ハ議事方、議事所、

6
集議局、集議所、衆議院ナドト云ツテ一様ナラザルモ、其議スル所ハ概ネ一様デ藩政上ノ事デアツタ。此ノ内衆議院ト云フノハ宇和島藩ノ議會ノ名ヲ稱シ今日ノ帝國議會ノ衆議院ト云名ナルハ面白イ。(宇和島藩議會日ノ事ハ宇和島吉田西藩誌ニ兵頭賢一氏著ニ詳シ)
然ルニ以上述べタ維新前ノ幕府ノ議會デモ、維新前後ノ朝廷並ニ各藩ノ議會デモ、各其政府ノ政事諮問府デアツテ、今日ノ議會即チ帝國議會ヤ府縣會ナド、ハ大ニ其趣ヲ異ニシテ居タ釋デアアル。唯此時代ニ於テ此等ノ諸議會トハ趣ヲ異ニシタ、一歩モニ歩モ進ンダ時代離レノシタ、一ツノ議會ガヤツタ。名ケテ四國會議ト云フ、又一名金陵會議トモ稱シタ。我國議會史中見落スベカラザルモノナルニ拘ラズ、此追其詳細ヲ記述セルモノナク、甚

ダ遺憾ナレバ、以下序ヲ追フテ詳述シマウ。

第二 四國會白議

明治初年ニハ全國ニ藩ガアツタ。之ハ維新前ノ封建時代ノ藩ヲ殆ド其儘明治政府ガ引継ゲ旧藩主又ハ其家族ヲ藩知事ニ任命シタ。ソレデ此ノ間マデ殿様トカお殿様ト申シ上ゲテ居タ方ハ今日ハ知事様ト云ハレル事ニナツタ。此ノ当時我ガ四國ニハ德島、高知、松山、高松、宇和島、大洲、新谷、今治、小松、丸亀、吉田、西條、多度津ノ十三藩ガアツテ、夫レ々々藩知事ガ藩内ノ統治ニアタツテ居ツタ。

四國會議ハ官員ニ此ノ伊豫、讚岐、阿波、土佐ノ四國、即チ上記十三藩會議デアアル。四國十三藩ノ議會會デアリ。

四國會議ハ四國會ノ會議デ六ヶ敷クズヘル區別モアラウガ一般ニハ四國會議ヲ四國會、四州會、九龜會議(コレハ第一回ノ會議ガ讚州九龜ヲ開カレタノテ第一回ノ分丈ケノ名称)、金陵會議、琴陵會議(コレハ第二回以後最終迄讚州金ノ毘羅町(今日ノ香川郡琴平町)ニ於テ會議セルニヨリ多ク之ノ名世ニ行ハル)四國周旋方會議等トモ稱セラレタ。當時各藩ノ外交官ニ他藩ト交渉周旋ノ任ニ當ル役人ニテ周旋方ト云ヒ此ノ會議ヘ出張ヲ命ゼラレシ、代議士モ周旋方御用ナド、云フ名称デアツタカラ四國周旋方會議ナド、云フ名モ附ケラレタ釋ダ、本書ハ主トシテ四國會議ト金陵會議ノニツノ名前ヲ便宜用ユルコトニシタ。

ニシテ四國中阿波ハ淡路ヲ含ミ、阿波土佐ハ各一藩ニマトマリ居ルモ讚岐

ハ高松、九龜ノ二藩ヘ九龜ノ支藩多度津藩ヲ加ヘテ三藩トナリ。伊豫ハ松山、宇和島、大洲、西條、小松ト今治、新谷、吉田ノ大小宗支八藩ガアツタ。今左ニ各藩ノ石高ノ大数ト藩知事ヲ掲ゲ参考ニ供シヤウ。

藩名 石高 藩知事 備考

高知 貳四貳、〇〇〇 山内 豊年 先代曲直信ハ隱居シテ谷堂ト稱ス

松山 壹五〇、〇〇〇 久松 勝成 松平ヲ改姓シ、前藩定昭明治元年退隱、父勝成再勤

宇和島 壹〇〇、〇〇〇 伊達 宗徳 父宗政ハ隱居

高松 壹貳〇、〇〇〇 松平 頼聰 後ハ八男頼壽ハ伯耆トナル

九龜 五壹五壹貳、 京極 朗徹



今治	参五、〇〇〇石	久松定法	<small>松平ヲ改姓ス</small>
大洲	六〇、〇〇〇	加藤泰秋	
西條	参〇、〇〇〇	松平頼英	<small>紀伊侯松平頼宣後也</small>
吉田	参〇、〇〇〇	伊達宗敬	<small>伊和島前藩主伊達宗城の弟宗春の男</small>
多度津	壹〇、〇〇〇	京極高典	<small>元龜ノ支藩</small>
小松	壹〇、〇〇〇	一柳頼紹	
新谷	壹〇、〇〇〇	加藤泰令	

第三 四國會議ノ發起

四國十三藩ノ四國會議ノ發起如何。答テ曰ク土佐藩ノ重要人物諸氏ナリ

リ。然ラバ彼ノ民撰議院設立ノ請願ヲナセシムルカ。然リ然レバ彼ノ請願ニ加ハラザル人モ亦四國會發起者ノ一人タルアリ。決シテ一二人ノ發起デハナク、少クモ数人ノ重要人物ノ發起デアツタ。而シテ然ラバ其思想ハ此ノ時代ニ偶然此等ノ人々ノ腦裡ニ創テ湧起ツタカト云ヘバ、決シテ左様ナモノデハナク、議會政治ヲ希望シ、之ヲ試ミントスル立憲的思想ハ古クヨリ土佐人ニハ天賦サレテ居タカノ様ニ思ハレル。少クトモ藩政時代ニ其思想ガ兆シテ居ル。又議會ノモノデハナイガ立憲思想ノ現ハレトシテ、二百余年ノ昔山内豊昌公時代ニ役人ノ一部公選ヲ試ミタコトヤ。目安箱トモハ、此種思想ノ云々ノ制ヲ布イテ為政ノ参考ニ資シタコトナドハ、トモ造ニ土佐人ニ此種思想ノ伝ハ、抱持サレシ証據デアル。議會制度ノ事ヲ考ヘタリ、主張シタリスルノハ、傳

12
統的思想ノ外、幕末傳未ノ泰西文明ノ影響ヲ受ケ居ルコトハ申ス迄モナ
キ事ナガラ。之ヲ西洋思想ノ受賣トカ、明治五六年頃ノ創安ホトカノ如ク考ヘ
ルモハ實ニ早計ト言ハネハナラン。自由ハ土佐ノ山間ヨリ出ヅ、言又偶然
ナラズテヤル。

扱テ四國會議ノ發起ハ土佐藩ノ重要人物ノ發起デ即チ土佐藩廳ノ輿論ト
シテ實現ニ努カスル事ニナツタ。而シテ其輿論ハ土佐傳未ノ思想ノ大勢
カノアラワレデアル。此ノ輿論既ニ坂本龍馬、長岡柎、後藤象二郎、神山左
多衛、福岡藤次、ヤドヅノ土佐先輩ガ懷抱セル所此等ノ人々ハ議會ヲ起シテ
政ヲ議スベシト云フ事ヲヨク云ツテ居ル。ソノ一ニ例示スレバ、

第一、慶應三年坂本龍馬ハ後藤象二郎ト共ニ上京ノ途中、船中デ海援隊文

司長岡柎(謙吉)ニ草案セシノタ維新ノ八策中ニ「上下議政所」ノコトヲ書クノ
イテアル。尤モ「維新ノ八策」トイフモノハニタニ通リニナツテ世ニ傳ハリ、其一ツハ石
田勇爵家ニ傳ハリ。他ノ一通ト區別スル為メ之ヲ「船中ノ八策」トモ稱セラレテ
居ル。今ノ上下議政所、云々ハ其第五義ニ掲ゲラレタ文字デアル。
又他一通ノ八策トイフモノ、中ニハ

一、上下議政局ヲ設ケ議員ヲ置キテ万機ヲ參贊セシメ万機宣シク公議
ニ決スベキコトトイフ一條ガアル

第二、慶應三年九月長岡柎ニ草案セシメタト傳ヘラレテ居ル大政奉還
ノ建白書中、松平容堂ノ家来、寺村左膳、後藤象二郎、福岡藤次、神山佐多

13
衛ノ四人連署ノモノニ

一、天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ朝廷ニアリ、則我 皇國ノ制度法則一切
萬機京師議定所ヨリ出ヅベシ。

一、議政所上下ヲ分チ議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ルマデ公明
純良ノ士ヲ撰擧スベシ。

ト云ツテ、上下両院ノ議會ヲ設ケ、議員ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ル迄
身分階級ヲ論ゼズ、公明正大純良ノ士ヲ撰擧セネハナラント速ニ更ニ

一、議事ノ士大夫ハ私心ヲ去リ、公平ニ基キ術策ヲ設ケズ正直ヲ旨トシ
既往ノ是非曲直ヲ問ハズ、一新更始今後ノ事ヲ視ルヲ要ス、言論多ク
實驗少キノ通弊ヲ踏ムベカラズ。

ト云ツテ、議員職責心得ヲアゲ通弊ヲ戒メテ居ル。此ノ建白書ノ議政所並ニ議
員ノ事ハ前記維新ノ八策ヲ骨子トナセルコト一目瞭然デアル。

第三、元土佐海援隊出版ト称スル藩論(冊子)ニ藩制変革ノ基本先務三件

トシテ第一ニ旧規ヲ廢シ、更ニ新律ヲ立ツル事ニ對シ、鹽ヲ藩異志ナキ一ノ誓約式

ヲ行フコト。第二ニ家格階級ヲ廢シ、世祿ノ法ヲ滅絶シ、一旦官等ヲ止メ、藩領内

人民ヲ平等ノ大公會ト見做シテ、其内ヨリ一般撰擧ニヨリ衆人徳望ノ歸スル者ヲ

豫定ノ人員丈ケ撰スルコト。第三ニ右当撰人員中ヨリ所用人員丈ケ更ニ互

撰シテ精撰ノ人物ヲ擧ゲシメルコトヲ論ジテ人材登用、衆議輿論ニヨル政

治ヲ主張シテ居ル。右ハ昭和九年二月発行ノ明治文化研究、編輯ニ所載ハ尾佐竹

博士所藏本、藩論ノ寫ヲ讀ミテ記ス。

又藩論ノ英譯本ヲ岩崎英菴氏が邦譯セルモノニヨルト、全書中ニ「凡そ國
権ノ行施ハ輿論ノ讚同ニ從フベシ、輿論ノ讚同ハ選良ノ會議ニテ決すべ

きこと。然して帝國の政治に適用さる、此法則は確に各藩にも通用せられるものであるから各藩は改革を行ふて一般選挙法を立て代議員を撰挙し、之れによつて藩政を改革せねばならんト云フ意味ノ事ヲ論ジテ居ル。

藩論ハ坂本龍馬ノ著述トモ、又坂本龍馬ノ説ヲ長岡惇ガ敷衍編述セルモノトモ云ハレ、故吉田正春氏ハ海援隊文司ノ長岡謙吉(惇)ノ著述デアルト云ツテ居タ。今上記ノ藩論ニ書目ヲ視テ替フルモ著者誰ナルカハ判定シ難イガ、元海援隊ノ出版デ坂本又長岡ノ著作トノ古来ノ言傳モアレバ、先ツ何レセヨ土佐人ノ論ノ様ニ思ハレルカラ、ソレガ此ノ第三項ヲ奉ゲタ譯デアル。

第四 土佐藩ノ福岡藤次ハ慶應三年十二月ニ 朝廷へ「議事御建立ノ御評

議在ラサレ度奉存候ト建議シタノデ、政府ハ明治元年(慶應四年)正月ニ徴士、貢士ノ制ヲ定メ、議政所ヲ創設スル事ニナツタ。如此土佐ノ先覺者が夙ニ立憲思想ヲ抱キ議會開設ヲ首唱セルコトハ、決シテ後年民撰議院ノ設立建白ノ運動ナドニ始マツタノデハナク、其淵源が遠ク古ク、其運動モ亦明治維新以前ニ始マツタモノデアルコトが明デアル。

而シテ四國會議設置ノ議ハ何時ノ頃カラ起ツタカト云ハバ、ソレハ土佐藩が奥羽征伐凱旋後、明治天皇ノ聖旨ヲ奉體ニテ軍備ヲ擴張充實シ、諸般ノ弊政改革ヲ断行シ進ニテ皇室ノ藩屏トシテ大ニ奉公ノ實績ヲ奉ゲネバナラズ、夫レニハ先ツ四國ナニシ藩ノ一致協同ヲ要スル。ナニ藩ガ一致協同シテ治績ヲアゲ相互ニ援助レ合ツテ外敵ニアタリ、一朝有事ノ際ハ後顧ノ憂ナク中央ニ出デ、

活動シ得ル様ニ平常カラ意志ノ疏通ヲ謀リ一致團結ニ置ク必要ガアルソノ
 為ニハ、第一番、四國會議ヲ起サシメテ、明治二年二月ニ土佐藩
 廳ハ小監察軍備係松下與膳綱武ト小監察前野敬次郎長順ニ四國各藩ニ
 ツキテ誘説シ、開議ノ事ヲ纏テ命ジタ。而使節ハ八沼田頼輔ハ此ノ兩人ハ
 下横目曾和族ハヨ從ヘテ發見シタト記セルモ、余ハ未ダ曾和族ハ隨行セル事ニ就キ
 確ナル見聞ナキヲ以テ唯參考トシテ附記ス。明治二年二月十六日高知ヲ發足シテ伊豫
 ノ宇和島藩ニ向ツタ。發スルニ臨ミ、參政板垣退助ハ板垣ハ維新前ニハ乾退助ト
 稱シ正形ト名乗リシガ東征中甲斐ノ板垣ノ裔ナリト改姓ヤリ、實ニ後年自由黨首トナ
 リ、更ニ社會改良ニ盡粹セシ無形伯其人ナル。使者松下與膳ヲ顧テ曰ク「會議ノ開
 催最モ速クランコトヲ欲ス、然レモ四國狹シト雖モ猶十三藩アリ、議ヲ纏テハ」

ト又容易ナラザルベシ、汝此行ヲ幾日ノ後復命セント期セリヤト、少アリテ
 與膳答テ曰フコト、一ヶ月後ニ必ず議ヲ纏テ復命セント、列座顔見合
 セ、中ニハ耳語シテ其ノ答辭輕卒ナルヲ笑フガ如シ、與膳期ス所アリ、衆
 ニ「事ノ成否ハ只實行ノ如何ニヨル、只余ノ成ス所ヲ視給ヘト」座
 ヲ起ツタ。

第四 土佐藩ノ誘説

松平與膳、前野敬次郎ノ兩人ハ四國會議誘説ノ使者トナリ、明治二年二月十六
 日高知ヲ發見シ、翌十七日午後四時頃宇和島ニ着シ、全十八日全藩ノ目附
 役山下清記、河原右左衛門、參政田手次郎太夫、檜垣彌三郎ノ諸士ニ面會シ
 會議開催ノ趣旨ヲ述ベテ同意ヲ求メシニ、全十九日檜垣彌三郎ハ全藩主

ノ命ヲ奉ジテ来リ、開議ノ件賛同ノ旨ノ返答アリケレバ、松下等ハ早速全藩ニ暇乞シテ早和島ヲ出發シ、全二十日吉田ニ到着シ直ニ全藩ノ全意ヲ得テ、全廿一日大洲ニ於テ全藩ノ參政山中嘉平、陣新兒、武田龜五郎、谷右衛門七ノ諸士ニ面會ス、松下等四國會議ノ件ヲ勸誘シ、互ニ議論ヲ戰ハシタルガ、結局全藩モ同意スル事トナリシ故、全地ヲ辞シ、翌廿二日午後四時過新谷ニ着シ、全夜松下等ノ旅宿ヘ訪來レル全藩ノ町代官矢野淳作(松下與膳自叙傳中ニハ矢野淳藏ト記セリ、何レカ正シキ)町支配増田連、宮脇平十郎等ニ四國會議ノ趣旨ヲ委細談話シ、翌廿三日ハ更ニ用人三橋藤藏(山上祐八全藩書生碧川眞澄、笹田才次郎等ニ面會シ、這回全藩ヲ訪問セルヒ旨意ヲ述ベテ勸説ス、全藩モ其趣意ヲ賛シ直ニ同意セリ、全廿四日松山ニ到着シ

全藩ノ大監察河東權之丞ニ面會シテ來意ヲ述ベ、誘説賛意ヲ求メシニ、全廿六日ニ至リ全藩ノ白河笹右衛門、河東權之丞ト同伴ニテ松下等ノ旅宿ヲ訪問シ、松山藩ハ土佐ノ主唱スル四國會議ノ議ニ全然全意スル旨返答ニ及ビケレバ、全廿七日午後二時往テ全治ニ着シ、直ニ參政富島格ニ面談シ、會議開催ノ事ヲ誘説セシニ、全藩ハ其翌廿八日信田島格ヲ以テ全意ノ旨返答アリ、依テ小松ニ向フ、廿九日小松ノ旅宿ニ於テ全藩ノ青山操ニ来意ヲ告ゲ、次テ全藩ノ陣屋ヲ訪ヒ、參政一柳煨助、田村九太夫、黒田左也助、里川知太郎、服部銀太郎ノ諸士ニ面會誘説ノ結果、全藩モ早速賛成ス、則今日馳セテ西條ニ到リ、翌三十日全藩參政伊藤準太ニ面會誘説ス、全夜伊藤準太就見勝八郎ノ両士來宿シテ全藩ノ全意ヲ表セルニヨリ、翌三月朔日西

條ヲ殺シテ、二日九亀ニ着シ、全三日九亀藩ノ執政土以権之丞、土肥大作ノ
 二士ニ面會シテ誘説セシニ、九亀並ニ其支藩多度津兩藩ノ同意ヲ表セラ
 レケレバ、全五日高松ニ至リ、全地旅宿ニ於テ高松藩町奉行寛又藏、参政小
 泉仲山本新平佐久間隆藏等ニ面談誘説ス、全六日石小泉仲山本新平ノ兩
 士来リテ全藩ヨリ全意ノ旨返答アリ、全九日ハ往テ德島ニ着シ、吉積權大
 郎奏者役足助衛人、寺面金石衛門ナドニ面會誘説ス、全十日新居與市、公田
 人武居列^{ツラネ}、西士ニ面會シ又誘説ニカム、而シテ漸ク同藩ノ同意ヲ得ク、
 是ニ於テ全部ノ誘説ヲ了リ、全十一日德島ヲ発シテ穴食、甲浦ヲ經ヘ全日
 十四日高知ニ歸着シ、直ニ藩廳ニ出頭シテ四國十二藩悉ク異議ナク我
 首唱ニ賛成セル旨ヲ復命ス、初メ松下等ガ命ヲ請ケテ廳下ヲ発足セシコ

リ茲ニ至ルマデ日數實ニ二十九日ニシテ豫テ松下ガ発スルニ臨ミ板垣
 参政ニ約セシヨリモ一日早ク使命ヲ果シタレバ参政一同其勤勞ヲ賞セ

以、松下前野兩使ハ大ニ面目ヲ施シテ退ケリトイフ、
(松下前野手記誘説日誌、全人自叙傳ニヨル)

宇和島藩ハ三月上旬上佐藩へ監察不破忠次郎、加藤虎一郎
(手前者ニテ後、川)

名謙藏ノ三人ヲ使ハシ、當時宇和島藩公ハ函館追討ノ際出矢スル能ハサ
 リシニ廉ニヨリ
戰艦其他手遣、出矢取リシ程ニ早ク是朝廷ヨリ謹煥ヲ命ゼラレ居

ル際ニ廿右謹煥相解クル迄ハ公議人モ代議員又ハ會議へ出席致サセ難シ
 サレ氏謹煥明ケノ上ハ取急ギ公議人ヲ出席致サセ申ス、
カラズ御諒承ニ預リ度シトノ挨拶ガアツタ。

第五 四國會議設置ノ趣意

土佐藩ハ明治二年二月ヨリ今三月ニカケテ四國列藩ノ同意ヲ求メテ四國會議ヲ起スコト、ナリシガ、更ニ今年二月廿三日附ニテ四國會議設置之趣意書ト、第一回ノ會議ヲ今四月十日九日ニ於テ開催シ將來ノ事ニ就テモ篤ト示談シ度キ旨ノ書翰ヲ各藩ヘ送達シタ、其趣意書ト書翰ハ左ノ通ナル

建置四國會議趣意書

患ヒ内ニ在レバ守リ各藩ニ在モ可也、患ヒ外ニ在レバコレヲ防グ全國ニ在リ、今也外國ノ勢日ニ猖獗ニシテ駭々乎殆ニド制スベカラズ、是大患外ニ在リ、然レバ六十州一家トナリ相與ニ協心戮力私ヲ去テ公ニ就キ左右手ノ相救カ如ナラザレバ何ヲ以折衝禦侮スベケンヤ夫レ身藩屏職ニ

居リ

列聖ノ鴻澤ニ浴シナガラ大患前ニ在リ國步多難而ノ各藩相顧テ手ヲ

袖ニシ曾テ決然カラ

王事ニ致ス能ハヌンバ其藩屏ノ職ヲ如何ンセン、コレヲ要スルニ各藩豈異心アラシヤ、其弊相疑慮スルニアルノミ、其レ奮然身ヲ以天下ニ先タツ能ハサル所ナリ、然ルユエノモノハ蓋各藩ノ國情相通セサレバナリ、故ニ敝邑ノ意一ノ會議所ヲ設ケ、カノ外内ノ利害彼此ノ得失及都鄙上下ノ情狀悉クソノ詳ヲ此ニ得ンコトヲ欲スルノミ、夫レ事アレハ必相聞シ、議アレハ必相圖リ、動靜必相通知シ、然後ニ協心戮力内ハ以

天朝ニ奉スベク、外ハ以外患ヲ防クヘシ顧フニ四隣ノ境ヲ接スルヤ、其

相違北近者八十數里、遠者ハ二三十里、尋常使人往來ノ能ク盡スベキニ非ズ、是敝邑ノ會議所ヲ設クルユエシノ意ナリ、然ニ聞者或ハ曰フ

天朝ノ令諸侯私ニ盟誓ヲ立ルヲ得ズ、會議所ノ設ケ、ソノ嫌ヒナキヲ得ンヤト、是大ニ然ラズ、何ントナレバ、是會議ナリ、盟誓ニ非ルナリ、即今上國三藩會議或ハ四國會ト称スル如キ亦是レナリ、抑問言ハ入り易ク人ノ言モ亦恐ルベシ、故ニ敝邑豫メコレヲ以、而輔相ノ閣下ニ達セリ、則世ノ人言モ亦畏ルベキナシ、ソレ六十州一家トナリ、全國相維持スルハ、敝邑ノ願ヒ也、而ソノノ能スヘキニ非ス。今且四國一家信義凜然、凡ソ事皆至公ニ出テ、彼此情ヲ通シ内外ノ變ニ應センニハ、他日近ヨリ遠ニ及フ亦此ニアランカ、只冀クハ同志ノ君子コノ意ヲ諒センコトヲ。

諸藩へ啓書

一筆拜啓、愈御健全御奉職奉謹賀候、然ハ敝邑宿望之筋有之、此程而生諸御藩江差出候處、惣而御別慮無御座、趣於敝邑本懐、不過之候、附而ハ右會議之地圖、龜ニテ可然ト御衆議モ候間、何卒來ル四月十日ヲ期限トシ、彼表ニ相會シ、其上ニテ尚又向來之所御示談仕度奉存、此段御通達仕候、恐惶謹言

三月廿三日

片岡 健 士口
高屋友右衛門
林 勝兵衛
本山 只一郎
谷 守 部

宇和嶋御藩

御重役中様

28
右ト全文ニテ大洲、新谷、松山、今治、小松、高松、徳島ノ各藩重役宛ノ書翰ヲ出シ、時ニ九亀藩ヘハ下記ノ如キ別書ヲ贈リテ居ル、尤モ以上ノ八藩ヘノ書翰ニハ各ノ左記ノ如キ追伸ガ認メラレテ居タ。

再啓右會議所ニ付別段議事堂ノ如ク新局相設候様萬一御聞取御座候而者甚背本意候全ク左様ニテハ無之寺院若クハ市宅孰レナリ此可然閑所有之候ヘハ一藩ヨリ二人或ハ三人探索ノ姿ニテ時々相會シ諸事御示談為仕度追々東京御會議等モ候ヘハ報知行違或ハ種々ノ浮説流言蜂起可仕旁以各藩探知之俟彼此會通仕候ヘハ事情之真偽得失明白ニ相辨シ御互ニ心得之筋ニモ可相成奉存候此程差出候者共若シ如何之申違有之モ難計為念此義申出候尚敝邑意趣大略別紙之通ニ候間

御諒察可被下候 以上

且御支藩ヘハ別段御掛合ニ不相成候間右之趣御申通被下度御頼申

進候 已上

九亀藩江掛合

一筆并啓愈御健全御奉職奉謹賀候然ハ敝邑宿望之有之此程兩生御藩江差出候處惣而御別慮無御座趣於敝邑本懐不過之候附而ハ右會議之土地未ダ取極メニハ不相成候得凡此度ノ一會ニ於テハ尊藩又ハ松山表等ノ内ニテ可然哉ノ衆議等モ御座候趣ニ付不遠慮之至ニハ候得共格段御故障ノ筋等無御座候ヘバ來ル四月十日ヲ期限トシ尊藩江相會シ向來之所篤ト御示談ヲモ仕申度依テハ御報不相待諾御藩ヘモ大旨前書ノ旅合ヲ

30
以掛合ニモ相及可申ニ付左様御承知被下度勿論會議所之儀極手輕ノ事
ニイタシ追々ハ夫形ノ規則ヲモ相立可申ニ付決而御配慮被成下間敷候
右為可得御意如此御座候、恐惶謹言

三月廿三日

片岡 健吉
高屋友右衛門
林 勝兵衛
本山 只一郎
谷 守部

九龜御サ藩

御重役中様

再啓右會議所ニ付別段議事堂ノ如ク新局相設候様萬一御聞取御座候而
者甚背本意候全ク左様ニテハ無之寺院若クハ市宅孰レナリ尼可然閑處

有之候へバ一藩ヨリ二人或ハ三人探索ノ姿ニテ時々相會シ諸事御示談
為仕度追々東京御會議等モ候へバ報知行違或ハ種々ノ浮説流言蜂起可
仕房以各藩探知之俟彼此會通仕候へバ事情之真偽得失明白ニ相辨シ御
互ニ心得之筋ニモ可相成奉存候此程差出候者共若シ如何之申違有之モ
難計為念此義申出候尚敝邑意趣大略別紙之通ニ候間御諒察可被下候
且御支藩へハ別段御掛合ニ不相成候間右之趣御申通被下度御頼申進
候、已上

以上拾通ノ書翰並ニ趣意書何レモ高知藩ヨリ時々送ヲ以テ各藩廳へ送達
シテ居ル。

31
此度御隣領諸藩重役之面々江別紙十通急速差立候間向藩郡代宛時付

送ヲ以相違候様御取計被成度如斯御座候、以上

山田駿馬様
中山左衛士様
浅利繁左衛門様

高屋友右衛門

以上ノ趣意書ヤ書翰ニヨツテ其目的ガ明瞭シテ居ル。即チ各藩ハ内外ノ利害、都鄙上下ノ情狀ヲ此ノ會ニヨツテ詳知シ、以テ流言浮語蜂起スルガ如キ際モ、決シテ之ニ惑ハサレズ、各其真相ヲ捉ヘテ能ク善處ニ事アレハ相聞シ、議アレバ相議リ、動靜必ズ相通知シテ割據ノ餘習ヲ除キ、以テ内ハ天朝ヲ奉ジ、外ハ外患ヲ防テ藩屏ノ職責ヲ全フセントスルニアルト云フニ在ル。而シテ之ハ政府禁令ノ明証言デナクテ會議デアル、會議ハ京都デ

三藩會議ヤ四國會トイフモノガ既ニ行ハレテ居ル例モアリ、猶世上ノ人が如何様ニ誤リ傳ヘルカモ知レ又故、此度ノ四國會議ニ付テハ土佐藩カラ政府ノ兩大官ヲ通ジテ既ニ朝廷ノ御諒解ヲモ得テ居ルカラ、此等ノ難ニ就テハ御心配御無用デアルト云ツテ居ル。

會議ノ地ハ丸龜ヲ第一圖ヲ開キ、後ハ協議ノ上決定シヤウ、議事室ハ取敢ヘズ民家ナリ、寺院ナリ、開靜ナ可然建物ヲ充テ用ヒヤウト云ツテ居ル。

参考、「建置四國會議趣意書」 四國ノ各藩史料、藩日誌等、此會議ノ關スル事ヲ

載セアリ。高橋藩誌ニモ此會ノ建置趣意書、各藩ノ書翰文アリ、然ルニ趣意書ヲ「建置

金邊會議趣意書」ト誌セリ、最初ハ未ダ琴平ニ會議スルトハ確定シ居ラネハ金陵ノ文

字ハ明治三四年頃、藩誌ヲ修書セル者ノ勝手ニ後ヨリ題センモノナルベシ。初ノ名ハ必ズ四國會議

テ否終リテ其名称ナリシモ、琴平へ移轉後、多シノ場合、金陵會日議ト呼バレシモノデアラウ。
三藩會日議ハ薩摩、長州、土佐ノ三藩ノ會議ノ事デアラウ。

四國會トハ京都ヲ明治元年カラ翌二年頃マデ四國十三藩ノ京都諸藩吏ニヨリテ組織セラレテ居タ會ヲシイ。之ハ明治三年以後モ繼續ハシテ居タシイガ、金陵會議が出来テ後ハ夫レ以前ト大ニ趣ヲ異ニシタトノ事デアル。四國會ノ事ニ關係シタ徳島旧藩士故根本熊次郎翁（昭和八年頃九十二歳ニテ卒ス）ノ談話ヲ左ニ摘録シヤウ。

明治元年ノ九月カ十月頃ト思フ、当時各藩ノ志士ハ中央ニ熱志スル者ハ上下共ニ其歩調ヲ等シクセナケレバ萬全ノ績ハ望ムケラレヌ、他ハ先ニ角四國ノ諸藩ニケケテモ、統一シテ上下ノ連絡ヲトリ、遠イ國許ニ居ル志士ノ機ヲ速センコトナク、京都ニ於テ四國諸藩ノ會合が行ハレタ、之ガ即チ四國會デアル。私モ留守居役ヲ京都ニ居タカラ出席シタ、ソレテ一々問ニニ三國位ノ會日合デアッタ。

明治天皇ハ江戸カラ明治元年十二月ニ御還幸遊バカレ、翌年四月ニ東京へ御遷リ遊バサタ、之ガ爲メ京都ハ直接其關係ガ薄クナリ、總テノ中心ガ東京へ移ッタ、ソレハ關係モアツクデアラウ。志士ガ四國ノ中央デアマル讚州琴平へ集合會日議ヲ始メタ、之カラ金陵會議ノ名モ起ッタデアラウ。元來四國會議トハイッタケレバ他藩ノ志士ヲ之ニ加ツタ、私ハ周防山口ノ人モ未テ居タコトヲ知ツテ居ル、云々。

右根本公羽ノ談話ハ實ニ参考トナル事デアルガ、京都ノ四國會トハ全然別個ノモノデア、四國以外ノ諸藩カラ未會セルモノ非常ニ多カリシ（後章ニ説ク）モ、此等ハ正會員デハナク、此會ヲ見學シ、又此會ノ立意見ヲ聞キ未レルモノデアッタ事ヲ此所デ附言シテオク。

四國會 香川縣史第一卷ニ此會ヲ四國會ト書イテアル、即チ日定年（明治三年）高知藩ノ首

唱ヲ以テ四國列藩ノ士ヲ琴平ニ會シ國家有事ニ際スバ各藩ノ團結方向ヲ一ニシテ以テ公議ヲ盡シ平

時ニ在テハ互ニ文武ノ學生ヲ巡遊セシメ専ラ親睦ヲ謀ラントス之ヲ四州會ト称ス。翌年ニ至テ此會自ラ廢ス。トアル、文節ナレトモ大要ヲ得テ居ル。

四州會會議自的 後條崎甲子次郎公稱ハ元琴平町ノ出身ニシテ四州會會議ノ事ヲ幼時ニ見聞シテ能ク記憶シ其會會議自的ニ就テ左ノ如ク云ツテ居ル。

各藩中ニ勤王佐幕ノ党互ニ相軋紛争ヲシテ未ダ分マ 天皇萬歳ヲ御親裁アリ、鎮上モ亦皇皇ニ返上セラレタ今日曠昔ノ如キ争鬪ニ要ナキヲ以テ將來ハ益々我が四州十三藩ハ互ニ團結ヲ固クシテ和衷

協同以テ四州治安ヲ鞏固シ、福祉ヲ増進セントスルノ由ニ聞ク蓋ニ要ハ從來ノ感情打破ニアリ也
大洲藩史料ニヨリ四州會會議ノ事ヲ足達儀國カ寫シ取リテ贈ラレシモニハ、四州會開設、抑

四州會ノ發起ハ高知藩士板垣退助首唱スル所ニシテ畢竟藩論ヲ各藩ニ及ホシ、專ラ親睦ヲ結ヒ論旨ヲ一定セントスルニアリ。明治二年春、月日不詳、州學堂ニ會議ヲ開キ四州十三藩

各二名ノ代議士ヲ出張セシム、大洲藩ヨリ武田龍五郎、西谷正道出張ス、該會タルマ四州ヨリ中國九州軒

次全國マテモ我ヲ一ニシ我皇國之本體ヲ守リテ確乎不可易ノ地ニ至ルヲ期スルニアリ、然ル所翌明治三

年十月一先議會閉鎖シテ各代議士帰藩ノ事トナル、然レモ時アツテ集會目之催有之者ナリ也

右ニ四州會會議首唱者ヲ板垣退助トセルモ決シテ彼入首唱ニ非ザリシコトハ前章既ニ述レガ如ク彼以上既ニ已ニ議會政治ヲ有感セン先輩アリテ、彼モ亦當時有カナル地位ニアリテ藩政革新意

アリシヲ以テ俱ニ之ヲ唱ヘ此ガ成立ニ盡カセシトハ疑ナキモ彼一人首唱ト見ハ早計ナリ、彼ノ後ノ事業ヨリ見テ又世間一般偉ト者ニハ誰モ彼ガ鉤ヲ附ケテ事實堅ノ偉績ヲ造ル嫌アリ、因テ他藩ノ

見シ所見シトシ、事實ハ事實トシテ茲ニ一言ヲ附セル旨譯テアル。文中○○○ノ印アル點ハ後章ニ於テ詳述スル事トスル。

却說テ四州會會議ノ趣旨目的ハ前掲ノ通ナルガ、此以外ニ裏面ニ猶ホ深イ

會議ノ意義が存シテ居タラシイ。ソレハ故谷干城子爵此當時谷守部ノ隈山貽謀録ニ

先達御國論ナル主意ヲ發表シ、先ツ四國ノ諸藩ニ遊説シ四國會合スルニ

ヲ琴平ニ起シ四國ノ諸藩ヨリ公議人ヲ出シ互ニ親睦ヲ結ヒ共ニ各々

ノ情况ヲ通報シ緩急相援ケルノ制ヲ定メシ發議者ノ主意ハ全ク一種

ノ企望アリ、切ニ謀ルニ天下ノ事朝令暮改人心未ダ服セズ、朝政ハ浮

浪徒ノ白ムル所トナリ動搖常ナシ其ノ勢不遠又乱ル、ハ避ク可カラ

ズ此ノ時ニ當テ薩長ハ必ず面立セズ相争ハ必然ナリ、我土佐若シ長曾

我部ノ轍ニ倣ヒ四國ニ兵ヲ用ヒハ假令勝算アルモ天下ノ時機ニ後レ

四國ヲ一歩モ出ツル能ハズ、是レ愚ノ至リナリ、仍テ此ノ會ヲ設ケ一致

シテ親睦シ事アルニ當テハ土佐ハ後顧ノ憂ナキヲ以數艘ノ汽船ヲ以

全○國○ノ○兵○ヲ○擧○ゲ○直○ニ○攝○海○ニ○入○リ○錦○旗○ヲ○擁○シ○、
王○室○ヲ○保○護○セ○バ○東○北○不

平○ノ○藩○固○ヨリ○畿○内○ノ○諸○侯○必○ズ○風○靡○セ○ン○ト○此○レ○意○中○ニ○含○ム○所○ノ○大○主

意○ナ○リ○シ○、
數○年○來○種○々○事○故○ア○リ○、
長○ト○ハ○事○ヲ○共○ニ○シ○難○キ○事○情○ア○レ○バ○事○宜

ニ○ヨ○リ○薩○ト○共○ニ○ス○ル○ノ○必○要○ヲ○認○メ○タ○レ○バ○薩○ノ○情○况○ヲ○窺○ヒ○且○親○睦○ヲ○結

ブ○ノ○主○意○ヲ○以○知○事○公○薩○公○ヲ○御○訪○問○ノ○コト○ハ○起○リ○タ○リ○、
十○二○月○廿○三○日○御

發○駕○ヲ○以○テ○三○ツ○頭○(○松○ヶ○鼻○)○ヨリ○安○國○丸○ト○称○ス○ル○御○座○船○ニ○被○召○浦○戸○磯○寄

御○殿○迄○御○出○ノ○所○、
天○氣○不○宜○為○ニ○其○夜○磯○崎○邸○ニ○御○一○泊○翌○日○御○帶○在○翌○々○日

即○廿○五○日○朝○四○ツ○時○紅○葉○の○賀○船○(○元○名○ノ○テ○レ○ス○)○ニ○被○召○即○刻○御○出○帆○翌○廿○六○日

夕○薩○州○鹿○兒○島○港○外○ニ○御○着○船○ナリ、云々

又全ク谷干城遺稿 上卷(附録第六 薩財政改革第十八條ノ記事申)ニモ

40
當時相議シテ曰ク他日ノ争乱ハ必ズ薩長ノ壓軌ニヨル此時ニ際シ我
ガ藩ハ孰レヲ助クル歟長州ハ固ヨリ姻戚ナリシモ近時ノ御縁組ハ破
鏡ト成リ而家互ニ面白カラズ薩州ハ智鏡院様ノ御里ニシテ三郎公
ハ智鏡院様御寶弟ニシテ忠義公ハ御甥ナリ且ツ慶應三年六月以來
西郷小松吉井ノ諸氏ニハ深キ縁故モアレバ薩ト事ヲ共ニスルヲ好シ
トス万一上國ニ變アレバ我が兵四艘ノ汽船ニ滿載シテ直ニ京師ニ
入り主上ヲ守護シ奉ル是上策ナリ若シ長曾我部ノ如ク四國中ニテ戰
争ヲ始マル時ハ日月ヲ徒費シテ上國ノ事ニ後クルレバ隣邦ト事ヲ構
フルハ拙策ナリ然レドモ國中ノ兵ヲ萃ケ皆上京セハ隣邦或ハ虚ニ衆
スレノ恐レ無シトモ難計今ニシテ隣邦ノ同盟ヲ謀リ親睦ヲ結ブニ如

カズ於是テ隣邦十二藩遊説シテ有事ノ際同盟ヲ説ク(宇和嶋吉田大洲
新谷松山西條今治小松多度津丸龜高松徳島)孰レモ喜テ同意ヲ表セリ
獨リ徳嶋ハ四國中ノ大藩ナレバ我藩ノ催シニハ快カラザルガ如キモ
異議ナク同意セリ即チ集會所ヲ金比羅ニ設ケ十三藩ヨリ各一而人ヲ
出シ互ニ懇親ヲ結ヒ各地ノ出末事ヲ通報スル事トセリ此ヲ四國會ト
名久是レ我が藩ガ後顧ノ憂ナク國ヲ慮クシ上京スルノ策ナリト斯ク
テ四國ノ連合ハ已ニ出来タレバ薩ト懇親ヲ結ブノ必要アリ即チ明治
三年二月下旬豊範公自ラ薩公御訪問ノコトニ決シ二月廿五日四ツ時
紅葉賀船(元名ノテレス)ニテ御出發翌日夕薩州鹿兒島港ニ御着廿七日天
神馬場築屋御殿へ御移轉薩公御来訪御對面廿八日薩公ヲ御訪問アリ

廿九日正午薩公再ヒ御来談其夕首尾能ク御衆船云々
 彼此相照考シ以テ四國會議建置ノ目的何処ニアリシカ能ク其全貌ヲ察知
 シ得ベシデアアル。

第六、第一回ノ四國會議（丸亀會議ト稱ス）

明治二年四月十日第一回ノ四國會議ヲ讃州丸亀ニ於テ開ク之ヲ丸亀會
 議トモ云フ、高知藩重役高屋左兵衛が司會者トナリ、今後ノ事柄協議セル
 モノ、如ク、其詳細ニ至リテハ、諸藩共ニ確ナ記録ヲ存セズ、為メニ四國會
 議ハ金陵會議デ、丸亀會議ナドノ事ヲ知ラズアル様ニ思ツテ居ル者ガ多
 イ。サレド四國會議ハ丸亀會議ト金陵會議トヲ總括シタ名稱デ、丸亀會議
 コソ其基礎トナツタ重要ナモノデアアル。

- 而シテ丸亀會議ニ參集セル各藩ノ議員ハ左ノ諸士デアアル。
- 徳島藩 橋本棟之助 森 信衛 高知藩 高屋佐兵衛 小森守太郎。
 - 高松藩 竹井守衛 菊池新三郎 松山藩 河原権之進 野中宇門。
 - 大洲藩 武田榮五郎 林 胖助 西條藩 鷲見勝八郎 永田靜之助。
 - 今治藩 高橋佐七郎 (今一人を欠) 丸亀藩 木村正一郎 浅見 福方助 (當時在京近見) (引取候條)
 - 多度津藩 野間傳三 河口伊助 新谷藩 寺井七兵衛。
 - 小松藩 黒川武夫 (今一人を欠) 宇和嶋藩 田手次郎太夫。
 - 吉田藩 今村集之進 高橋清藏。

右ハ改訂肥後藩國事史料ノ一新録探索報告ヨリシモノニテ、其他ニハ未ダ資料
 ヲ見当ラズ。此ノ一新録探索報告ハ肥後藩ノ探索人が明治二年五月ニ吉田藩ノ高

橋清藏ト遊舟ニ同乗シ、舟中デ高橋カラ聴取ツタ報告デアル。之ニヨルト、宇

和島藩カラハ、田手次郎太夫ガ出席シテ居ル。此ハ豫テ全藩カラ土佐へ出席ガ遅延レ

ル様ナ挨拶ノ使者ヲ寄越シテ居タカラ、多少遅延シテ出席シタデハカシウカト思フ。

又此報告ニ金陵集會所ヨリタルニヨツテ下記參考記事ノ土佐出張役人松下與

藤ノ日記等ト对照シテ四月十日カラ丸龜會議ガアツテ、間モナク會議ノ

地ヲ金比羅ニ決定シテ第一會議ヲ開ケタモノヲシイ。

猶右出席者ニ就テ大洲藩史料ニ丸龜藩ノ浅見氏ハ勇馬、徳島ノ橋本氏

ハ市之助、大洲ノ武田氏ハ亀五郎ト云フ名ガ出テ居ル。上記探索報告ノ通

カ、又大洲史料ニアル通りカ、猶調アベキデアル。

又土佐藩ノ出席者ハ上記ノ外、横山匠作大隊司令、松下与膳小監察、二人隨員テ

出席シ、宮地彦三郎ハ當時土佐御預所頭取デ八木彦三郎ト称シテ讃州ニ在勤中、此會

議ニ出席シタ。西條藩カラモ上記ノ外ニ長谷川與市ガ出席シタラシイ。宇和島

藩ハ上原郷助山下清記ガ田手ニ隨行シタラシイ。

次ニ此ノ會デ決議シタト思ハレル事項ハ大体左ノ如キモノデアル、併シ之ハ諸藩ノ

史料又ハ諸家文書等ニヨリ綜合シタ考デ必ズシモ此ノ通りデアツタトハ明言シ難キ

程度ノモノデアルコトヲ、コトハツテ置ク。

一、皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守シテ違背ナカラシムルコト (篠崎氏報告)

一、會議所ヲ琴平ニ移シ全地ニ常置スルコト、

一、各藩ノ公議人ヲ琴平ニ駐在セシムコト、

一、公議人ハ其本藩ト京都、東京トノ間ノ連絡ヲトリ探索、報道、議事ニ任ズルコト、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、

一、毎年春秋二回(四月十月又九月)各藩重役出席シテ大會議ヲ開クコト、

(通常會議ハ毎月十日ニ行フコト(十日廿日廿日)(此項宇野氏所報)

一、公議人ノ撰定ハ格式ニカ、ハラス人材ヲ登用スルコト。モ至誠憂國ノ士タルベキ

コト、等

九、龜會議ニ就テハ大体上述ノ次第デ此會議後、琴平ガ會議地ニ決ツタ。第一回ヲ

何故九龜ト指定シタカ、又其後ハ何故琴平ト定メタカ、何レモ理由ヲ明記シタ物ハナ

イガ、余ノ察スル所ニヨレバ、九龜ハ當時交通ノ要津デ特ニ明治元年以來土佐ノ

海援隊ガ藩命ヲ受ケテ豫讃御預リ地支配ノ為ソ本陣ヲ此地ニ置キ長岡向ハ本

彦三郎(後宮地ニ復姓)等ガ居リ、種々關係デ土佐藩定宿ヤ御用高人等モツタ

ニ、且ツ九龜藩ハ維新當時土佐ト行動ヲ同クシ、志士土肥元身ヤ田岡小輔ナド

ハ土佐人ニ知己多ク、土佐ヨリ相談ヲナスニモ萬事ニ付ケテ如オヤク利益

多ケレバト云フノデ九龜ニ指定シタ譯デアラウ。又金比羅ハ古來金毘羅大

權現ノ領地デ全ク藩外ニ在リ、今ハ又土佐藩御預リ所デハ本彦三郎

地鎮撫頭取ガ在勤シ、從ツテ土佐ノ本陣モアリ、土佐ノ兵隊モ駐在シ、總管内ニ琴平

金光院等ノ大建築物アツテ時々之ガ借用モ容易ニ出来ナルニ、此所トハ各藩

提議ノ公平ヲ持スル上ニモ便利デアル、且ツ又此地ハ年中全國カラ實者ガ参

集レ殷賑ヲ極メルカラ時情ヲ知ルニモ亦便多シト云フノデ、此地ヲ選定

コトデアラウ。

参考。琴平ニ就テ、徳島ノ故根本熊次郎翁ハ、琴平ハ天領地デ天下志士ノ集

ニ好適地デアツタデアラウ、維新前ハ薩摩ヤ長州諸藩ノ勤王志士ヲ初メ、河州

歟

ノ森寛齋ナドモ此所ニ隱レテ居タコトガアリ、美馬君田モ亦全地ニ居ク故萬事ニ在ル
ヨク、便利タカニ此ノ會議モ此処ニ開カレタコトデアラウト語ワラセラル。

九電會議ニ就テ、松下家文書目、即チ故松下鷹兮ノ四國會議出席書目及全人自叙傳

ニヨレバ、明治二年四月四日、大監返示高屋左兵衛、大隊司令横山匠作、小林守太郎、小監返不軍事ハ

松下与膳等々由開催、四國各藩聯盟ノ九電會議ハ出席ノ為、高知ヲ出席ス。松下ハ九

電會議用係ヲ命ゼラレシヨリナリ。今八日九電ニ着ス。今九日西條藩就見勝八郎、長

谷川與市兩人九電ニ参着、土佐藩出張役人ノ旅宿ヲ訪フ。次テ四國各藩議員九電ニ参集ス。予

和島藩ハ〇〇〇ニテ使節不参ノ旨公翰。四月九日、九電ノ土佐藩吏ノ許ニ着セリ。今十日第

一議會開催是レ實ニ四國會議ノ發端也。次テ金比羅ニ會議所ヲ開キ即チ還ル。

右松下文書ニハ十日ノ開會日マデハ日々大要ヲ誌セルモ、會議日間ヲ何日琴平ニ行キシカ記載シ

又文中〇〇〇ノ文字ハ、多分謹慎中ナルベシ、是ニヨツテモ九電會議ノアリレコト、確シナコトデアル。

宇和島藩ノ出張、ハ四月十日ヨリ進ヒタデアラウ、ソレハ藩公謹慎中ニテ謹慎明ノ後出席スルニカ

為、期限ニ達シカモ知ヌカラ豫メ御承知置テ願フト云フ意味、挨拶ノ使者ヲ吉田、高知ニ遣ハシタルコト、而

藩ノ史料ニ明チアルカラ。

又宇和島藩史料ニモ、全藩ヨリ出張ノ命ゼシタハ、鈴木康吉、須藤健但馬、向原治左五門(後告森ノ祭圃)

土佐兵衛等デアル。實際出席セルハ否ヤハ不明ナル。

第七、金陵會議、琴陵會議トモ書ス

四國會議ハ九電ヨリ琴平ニ移リ、後琴平ヲ閉鎖セリ、故ニ第二回以後此會ヲ琴

陵會議、金陵會議等ト称セラル、後ニハ第一回ノ會議ヲモ總称シテ金陵會議ト称スルニ

ナリ、今日ハ四國會議ト云フヨリモ金陵會議ノ方通りヨキソ以テ本書ニ廣

以ニ解レテ金陵會議ニ名四國會議(本末顛倒ノ感アレ)ト顯セルガ正確ニムフ時ハ四
 國會日議ハ丸亀會議金陵會議ニツト同ジテアル譯デアル。扱テ琴平ニ於テハ四國會議
 即チ金陵會議ハイツカラ開カレタカトヨフ事ハ遺憾ナカラ未ダ不明瞭アル、明治二年四月
 中旬以後全五月上旬迄ノ間デアラウ。ソレテ其例會ハ何日何日デアレカ。
 例會日 明治二年十月頃迄ハ毎月十日。即チ十、廿、廿日ノ三日デ、ソレ以後
 公三年六月迄ハ毎月五ト十日。即チ五、十、十五、廿、廿五、卅、卅六日デ、公年
 六月以後ハ三、五、八、十、日。即チ三、五、八、十、十三、十五、十八、廿、廿三、廿五、廿八、卅
 ノ十二日トイフ風ニ段々會議日ガ増加シテ來タ。若シ豫定ノ會日ニ差
 別ナドアル時ハ會議日ヲ繰上げ、繰下げナドシ、時トシテハ流會日トシタ事
 モアツタ。

會議前ハ主ニ土佐ノ本陣デアツタ。土佐ノ本陣ハ旅宿森屋喜太郎ノ
 和家デ本屋旅宿西隣ニアツタ。此所ハ土佐役人ノ旅宿。即チ土佐御預リ所役
 人ヤ、土佐鎮撫所頭取ヤ、此ノ會議、為ノ出張シ來レル役人達ノ宿デアツ
 タ、下度令ハ虎屋旅館ノ助向フ丸亀、奥行家ニシテ有名ナル、矢野某氏所有トナリシトアリ、今如何ニ當レリ。本陣ニ
 テ都合悪キ時ハ他藩ノ旅宿マ寺院ナドヲ借受ケ會議所ニ充テ居タ。
 公議人 即チ代議士、議員ハ當時ハ周旋方トモ出張役人トモ探索係トモ
 ムツタラシイ。或ハ出方役人ト書イタモノモアル。各藩カラ正副二人又ハ
 三人ヲ派シ、此等ノ若ガ自己ノ若党小者ナドヲ召連シ來レルモアリ、又長
 ク全役ヲ勤績シテ出張シテ居ル者ハ家族連レノ者マアツタ。今治藩ノ玉井
 八彌ナドハ其一人デアル。公議人ノ外ニ晝日生ヲ派遣シテ居ル藩モアツタ。

公議人ハ毎會日ニ出席シ、事ヲ議レ或ハ他藩ノ動靜ヲ探リ、本藩ト他藩又
ハ他ノ出張役人等ト相連絡ヲナシ、時勢ヲ研究調査シ、或ハ列藩トノ親睦ヲ
ハカル等相当多方面ニ活動シタ居タモノデアル。

幹事、此ノ會日ノ一般ノ事務、幹事ヲ定テ之ニアタラシメタ、其制毎月ニ藩又

ハ三藩ツ、順番ニ廻シテ、重要事ハ帳簿ニ書記シテ其月末ニ次番幹事へ

引キ継グ例デアツタ。月々代ルノ月幹トモツタ。他藩ノ使者ヲ探索又ハ浮

浪ノ士ニ應接シタリ、會議ニカケル事件ヲ調べタリ、議事後ノ整理ヲ懇

會ト云ツテ親睦ノ為ノ宴會ノ事ヲモ幹事ガ周旋盡力カシタモノダ。

記録ニヨルト明治三年二月ハ土佐(他ノ藩不明)四月ハ大洲、阿波西條、五

月ハ松山、丸龜、六月ハ高松、吉田、多度津、七月ハ小松、大洲、阿波が月幹デアツタ。

重役出席ノ大會議ノ記録ニ残レルモノハ四回ノミニシ、第一回ハ前記九

重會議ヲ明治二年四月十日ヨリ開會、會議日数不詳、第二回ハ延平ニ

於テ開カレタ初テノ大會議、明治二年十月六日ヨリ全月廿一二日頃迄約十

六七日間ノ會期デアツタ。第三回ハ無論コレモ延平テ、全三年四月十九

日ヨリ二十二日マデ四日間ノ會議デアツタ。然レ此時ノ會ハ豫定期日ヨ

リモ七八日間モ土佐ノ重役ノ出席ガ遲レタ為ニ正式會議日数カ何時

モヨリ非常ニ短カツタ、早ク出席レタ藩、重役ハ前後十一二日間モ延平

ニ滞在シタ訳ダ。第四回目ハ全三年九月十七日ヨリ廿二三日頃マデ約

六七日間ノ會議デ、此ノ時ノ會議ハ實ニ當會最終ノ重役大會日デアツタ。

片岡健吉日誌抄、明治三年九月金陵會議所へ被差立、全十七日金陵着、全廿四日金陵

出立、全廿七日高知ニ帰着、トナル。

第四回大會議ノ事ハ今治市池上文書 金陵日誌等参考ニナル

會議所、大會議ノ場所ハ土佐藩本陣ヤ寺院ノ大廣間書院等ナル。第二回ノ大會議ハ金陵日誌ニ役所ニ於テ會議トナル、役所ハ即チ本陣森屋ノ事ナル。沿田頼輔氏モ明治維新史ノ研究ニテ明治三年十月諸藩代表約三十名ハ當時設置サレタ山内會議所ニ集會自テ云々ト云ツテ居ル。此ノ當時設置サレタト云フ語句カラ考ヘルト、土佐ハ森屋ヲ本陣トレ、又之ノ本陣ヲ會議所トシテ常ニ會議シテ居タカラ、廣義ニ森屋ノ辺モ山内ト称シテ、山内會議所ニ集會シテ云々ト云ツテ居ルダラウ。サモナクハ當時土佐ハ別ニ山内ハ會議所ヲ設置シタ事ハナイ。然シ今月七日ハ金毘羅金光院ノ千圓宣敷ト称スル所ヲ借

テ會議シテ居ル。此ハ六日初日ニ於テハ會議所即本陣第二回ノ七日ハ寺院ト前ニ云

ツタノハ此ノ金光院ノ大廣間ノ事デ、之ヲ人ニヨツテハ金刀毘羅宮書院トモ云ツテ居ル。然レ之ハ全一物デ此頃迄神佛混淆デ金刀毘羅大現權ハ金光院ト称スル寺院ガ祭ツテ居タカラ結局、全一所ノコトラシイ。

参方、香川縣史蹟調査委員、坂出町鎌田郷土博物館主事岡田唯吉氏ガ池上融、高橋彦之丞ノニ氏ノ問合、對シテ「明治三年九月ノ大會議所ハ金比羅宮書院ヲ借受ケ使用セル由」(各通)回答セラレテ居ル。又琴平出身ノ篠崎甲子次郎公初ハ「此ノ大會議所ハ金比羅金光院ノ千圓宣敷ヲ充テト聞クト云ツテ居ル。」

高知藩ノ土佐本陣ハ明治二年十二月廿四日土佐ハ森屋ニ喜太郎カラ金三百五十兩ヲ買上ガタ、不林屋ハ此後モ不相変本陣隣ヲ旅宿ヲ営ミ土佐役人ハ此家ニ滞在シテ居タトノ事デアル。

各藩ヨリ大會議ニ出席セル重役ハ一藩ヨリ一名多キハ三名ニ及ブモヤ

リ一様デナカツタガ其隨員ト共ニ三四名ヲ普通トスル故ニ會議ニ列ス

ルモノハ三十三四名カラ四十名位ノモノヲ有ツタラシイ。四回ノ大會議

ニ出席セル重役ト思ハレル人名ヲ奉グルト

高知藩 高屋左兵衛 渡邊弥久馬、本山只一郎、乾作七以上三名ハ

大会议
(琴平) 深尾丹吉郎(第四次大会议
琴平) 片岡健吉(第四次大会议
琴平)

宇治藩 田手次郎太夫

吉田藩 飯淵縫(伊井剛縫殿、飯淵貞澄
諸史料中、此二名ノ名前各別ニ
考トスル)

大洲藩 大橋重之、吉田素水、山下與次右衛門

松山藩 久松志津馬(別史料、久松、
静馬トシ) 鈴木重遠、野中守門(野中久徴ト書セルモ
アリ今人ナルベキ)

河原権之進

小松藩 黒川知太郎、武藤主計武藤加守系ト書セルモ
アリ 青山操

新谷藩 寺井七兵衛

今治藩 竹元年之進、富島格、太武五郎、池上邦五郎

西條藩 徳永三四右衛門、就見勝八郎

多度津藩 畑平學子、河野胖助

丸亀藩 大口権之丞、土肥大作土居大作ト書セル
アリ 大塚八郎右衛門

高松藩 菊池新三郎、竹中守衛

徳島藩 新居與一助、武居列、橋本席之助(武居列又、武居列ト記セル
ルモノアリ武居列ノ誤アリ)

猶ホ此ノ外ニモ有ルベシ氏記録ノヨルベキナシ

一般公議人並ニ各藩出張人名ハ大要左ノ如キモノデアル。之亦纏リタリ
記録ナク公議人ナラザル役人モ或ハ重役會儀ニ出席シタル重役モ
混記シ居ルヤモ計リ難シ。此等ハ十分研究ノ上後日訂正加除スル考ナレ
バ讀者此ノ意ヲ諒シ氣付ノ矣ハ示教セラレタシ。

高知藩 中村觀一名ヲ觀一、母一、貫一 八木為三郎宮地庫吉又藏吉、宮地彦三郎、
旗、變名松平沖之進、佐々木三村進、神

田澤次郎等、
能セシ人 桑原平八川原塚茂太郎、桑原讓、島村祐四郎、田岡小文

本林助唯次郎等 以上ノ人々何モ維新ノ勤王志士ナシ、島村氏ハ贈位ノ息典、浴ヲ

居ル。 宇和島藩 山下清記 土居瀨兵衛以上大洲藩史料
ヨリ定達ノ報告 川名謙藏明治三年七月、
ヨリ九月 水原

均明治三年 伊藤柳定誥 遠藤元行松山、西園寺氏、今法池上
氏、宇和島、兵部氏報告 以上ノ外、鈴木亮

吉河原治屋門、須藤但馬、上原柳介ノ三人、出張命令ヲ受ケ居ルトモ實際出張セシヤ否不明ナリ。

吉田藩 飯刈眞澄逢ト全人ナリ、又飯刈大參事
(三年九月ノ大会ニ出席)ト云々 甲斐素雄 今村阜之進

高橋清藏、富永四郎以上大洲藩史料
ヨリ定達ノ報告 本林修吉 定誥、甲斐順宜 定

誥、武藤忠雄三年九月ノ大会ニ出席、
時ニ梅少參事 田中精太郎 飯刈大參事隨員、増美岩太郎 全上

遠山新 齋藤新川以上二人ハ松山、
西園寺氏報告

小柘藩 黒川武夫黒川猛雄ト
書カレタル 二股今朝松、武藤茂平治 定誥、飯塚一

郎 定誥、黒田佐之助、佐伯琢右衛門以上全慶日誌、
今治、池上ノ報告、
其他ヨリ

大洲藩 武田亀五郎 西谷正道以上大洲藩史料
ヨリ定達ノ報告 西谷琳藏 西谷彌藏以上全慶
日誌、今治、
池上ノ報告

松山藩 浦屋登藏 岡宮小左衛門 野中守門 藤野友之進以上全慶
日誌、今治、
池上ノ報告

洲定達ノ報告、
吉村嘉加續 定誥、徳永義次全上、伊藤勇全上、久松志津

馬靜馬ト書ケルモノ以上全慶、新谷藩各日誌、
吉田藩報告、並、池上、西園寺氏報告ニヨリ、 藤野進、長屋忠明以上全慶日誌、
今治、池上ノ報告、
吉田藩報告

新谷藩

矢野淳作 津田順藏 松村操 以上大洲史料
三達氏報告 谷村 名不詳
金陵日誌
一井清 西園寺氏報告

今治藩

米倉貞吉 丹下量平 玉井八彌 定譜
以上大洲三達氏報告 竹元平之進
書記 渡邊章 富田賢三 以上金陵日誌、金陵地誌
報告、其他三〇九

西條藩

長谷川典一 服部要藏 以上三達氏報告 和田東作 和田四郎
山井幹六 以上金陵日誌 (外三小川恒藏、八全藩公議人ヲナイカト疑念ナリ)

多度津藩

野間傳藏 小崎謹之助 中村三千藏 以上大洲三達
氏報告 平野俊治
郎 岡田貞治 庭村偉之助 三達氏
報告 中村林藏 三達
氏報告 林勇藏

三達氏報告 勝田周藏 野間利右衛門 以上三達氏報告

九亀藩

淺見勇馬 木村五一郎 以上大洲三達
氏報告 新井彌學 勝村與惣

高松藩

村瀬彌三郎 青木 名不詳 定譜
以上金陵日誌及世古報告
野口吉右衛門 松崎駿藏 以上大洲三達氏報告 綾野彌八郎 松崎駿
以上金陵日誌三三。松崎駿藏、駿谷八全、非ヤト思ル主、暫ク死テ
後日、訂正ラマツ。 福家清太郎

松本世貞四郎 以上三達氏報告

德島藩

瀧直太郎 森信衛 武居列 以上大洲三達氏報告
武居列ト書ク、全一人ノ事ナリ。 (重役)
山内十寸 坂隼之助 森武左衛門 松岡教之進 定譜 小笠原
名不詳、
武市名不詳、以上金陵日誌 大山藤之進 三達氏報告前、福永氏
德島、山内氏一氏報告

参考

德島藩ノ周旋方並ニ本會ノ公議人ニ就テ德島ノ故根本熊次郎翁ノ語ヲ
テ曰フニ、公議人中、橋本氏之助ハ助仕西町橋本晚翠先生ノ養子トシ奉行。又山内十寸

ハ助仕西町ノ組士。坂隼之助ハ大岡山三達氏ノ組士。大山藤之進ハ富田中屋敷ノ才作ヲマツ。以上、外ニ天

徳島藩ノ周旋方ヲ勤メタ人ハ澤山アル。武智高吉、宮田中野、アツタカ、儒者子、小奉行、アツタカ、
久、水野栄光、出雲島、組士、長谷川安道、医師、小姓、福屋玄、大岡ノ医者、小姓、此等ノ人々ト
外ニ淡路カラ来タ若手ノ佐藤直太郎、小姓、伊藤金五郎、小姓、小塚トモ、字、不明、小姓、總務徳三郎
組士等モ周旋方デ四國會日議ニ出席シテハシカト思ハレル云々

第八、金陵會議所ノ規則

四國會議ハ上記ノ如ク明治二年四月十日九龍ヲ始メテ開會シ、次會ハ會場
ヲ琴平ニ移シ、ソレヨリ秋田ノ例會、通稱ノ後明治二年十月ニ第二回ノ大會
議ガ矢張コノ琴平ニ開催セラレタ。此ノ會議ハ高知藩カラ左ノ意見書ヲ呈出シ
タ。

會議所要既ニ趣意書之表灼然タリ、然ルニ集會交誼之際ハ亦而各藩固

ヨリ本體之見不異ト雖區々之事件ニ至自然不同者有之、或未其和之實
効不顯ニ似タリ、是最會議之所憂也、從來藩々各立私法以テ其國政ヲ維
持ス亦藩癖ナキ不能

今也 朝廷中興郡縣之名義ヲ正シ天下之政一致ニ歸セントス何ソ區
々ノ議論アラシマ更ニ各藩々癖ヲ一洗シ虛不共和是勉メ互ニ得失ヲ
計リ朝政ヲシテ流行セシメ遠ク宇内之形勢ヲ察シ近ク大八洲之事實
ヲ酌ミ、皇國卓然所置之道ニ注意シ、四州一心カヲ王事ニ盡サント欲
ス、

一、會議所轉地最可ナリ。

一、大權參事國事多忙各藩同情時々出會不向カト追々出張之人物各

政府之意脈可違者殊ニ之ヲ精選スベシ。

右ニヨツテ考ヘルト、各藩大体ノ意向ハ同一ナルモ其区々ノ件々ニ就テハ、各藩々癢ニモ依ルモノカ、實ニ意見マシクテ困ル。今日憂フル所ハ實ニ此矣。今日、各藩合何ソ区々ノ小異ヲ争フ暇ガアラウカ、宜シク区々ノ争ヲ止メテ遠ク宇内ノ大勢ヲ察シ皇國ノ為ニ四國ガ一心協力シテ王事ニ盡カシヤウ。今ノ會議地、琴平ヲ都合悪シトスレバ可然地ニ轉ルモ最モ良イ事デハアル。又大会出席ノ火參事、權參事^大ナド云フ大官ニ國務上差出カアツテ出席シ難イ時ハ出張人物ヲ精選シ、十分各政府ノ意脈ヲ通ジ合フコトニカメタシ。トノ意味デ各藩ノ意見彙メテ所會議地ハ琴平ヲ可トシ、出張人物精選ノ件ヤ會議ニ就テノ一般注意ハ原安ホニ賛成シタモノ、様デアル。

サテ、ソレナラ此會議ノ規則ハドンナモノデアツタカト云フト

金陵會議所規則

- 一各藩御交際稱呼者總而從前御面敬之舊例ニ效ヒ可申事。
- 一夫ニ朝權ヲ張り國政ヲ維持スルヲ以テ今日ノ方向目的トスベシ。
- 一當今會議所ニ而議事ノ模様ニ寄 天朝一同等總テ月幹番ニ而天裁ヲ受ケ然後御各藩江通達之事。

一各藩々政事ノ大體ニ關係スル事ハ成文會議所へ持出公議ヲ取之事。
會議所出所之人ハ藩々政府關係憂國之士人撰之事。

右者昨年末當會議所相立候處未至實効依而各藩ニ於而今一際憤發盡力仕屹度實効相立自然 朝廷御輔翼之一端共相成可申々決議相成候

六月

レハ午ノ歲六月ノモノテ即チ明治三年六月ノモノテアル。(改訂肥後藩國事史料ハ一新録探索報告ニ載スル所)參年六月以前ニ如何ナル規則カアツタカハ判明シテ居ラヌ。或ハ之ト大同小異ノモノカ、ソレトモ不文律ノモノカ推知シ難キモ、大体ハ如此振合ノモノカト察セラレル。

之ノ規則ニヨルト、マダマダ豫期ノ如キ毎夏效ガ顯レテ居ナイ様ナル。

第九 金陵會議々事々項

諸氏諸文書等種々ノ資料ニヨリ、本會議ノ議事々項ヲ總合列挙スレバ大体下ノ如キ諸件デアリタ。

一 皇上ヲ奉戴シ 朝旨ヲ遵奉シ違背ナカラセラルコト (前出再録)

一 會議所ノ規約規則等

一 會議所ノ經費ヲ移スコト、自今此ノ會議ヲ金陵會議トニ稱ス、

一 公議人ノ担当事務及其人數ヲ定ムルコト

一 月幹ヲ定メ、其事務、順番等ヲ定ム (明治三年十月六日會議事項)

一 前田會議ノ規則ノ條ヲ論議ス (今二年十月十日)

一 金陵出張所ノ費見積 (三七八二兩三錢七分五厘) (今三年十月十日決定)

此項金陵自誌所載ニテ金陵會議關係カ又、高知藩出張所關係カ未ダ正確ニハ判明セザレバ、茲ニ記シテ將來參考ニ供ス。

參考) 明治二年五月廿四日、明治政府最初ノ豫算ヲ編成シ上局會議 (御下問ニテリ) 歲

出處入ヲ見ルニ

歳入凡總高七九二〇五。〇石余。此免分五重手米一七九一三五〇石余
歳出合計 三二四六六。六石余。上皇室、神宮宮繕ヨリ公債利子、非尚中豫

備費之至ルニテモ合ム

差引不足米三六五、三一〇石余 別ニ諸税アリ

一、近路取調ノ件 (今三年五月十五日交議)

一、浮浪應接ノ事 (今三年二月廿日交議)

一、癸佛、徒刑、人曹議所廢止ノ議 (今三年四月五日)

一、規則論 土佐藩提議

一、常備兵論 大島藩提議。以テ二件ハ共今三年四月九日迄ノ事

一、方角論 大島藩提議
三年四月十九日

一、甬來出張人ハ退席シ今後重職計出張會議ノ事 (今三年四月廿日)

一、會議規則ノ件 (今三年四月廿三日)

一、廢刀之儀 多度津藩提議 (今三年五月朔日交議)

一、杖罪以下罪人ハ其藩々ニテ執行スル事 (今三年五月朔日交議)

一、廢刀令ヲ日本全國ニ布クニシテ太政官ニ上表スルニト (今三年五月六日、保留)
但シ德島藩公席ニテ交議ニ至

一、廢刀令ニ關スル上表ノ件 (今三年五月八日、瑞場一政提議、実行準備ニ着手)

一、德島藩ニ動搖アルヲ以テ全藩ヲ助クルノ論出ツ (今三年六月廿日)

参考 淡路ハ阿波ノ別藩ヲ稲田家ノ所領ヲツタガ明治二年、安永ヲ行フテ以テ未ニ藩制ニ不

滿ノ津軍ガ騒出シタ、今三年五月阿カ加藩公蜂後賀氏ガ稲田九郎兵衛ヲ召連レテ十二日ニ德

島ヲ出帆シ、今十四日ニ逆軍東京ニ到着シタ。此ノ留守ニ阿カ加藩カラ須本城ヘ討テテ差向テ

テ本藩相從ノカ、ドウカト手詰、談判ニ及ニダ、淡路方ハ仲々承畏マヌノデ、忽一
戦ニ及ヒ、終ニ十音ニ須本城ヲ焼拂ヒタル即死四十三人、生捕三百余人、本藩方モ年員死人四
人、内二人が死者、ヲ出ヌトモフ騒動ヲ、船田ノ一老、井上九郎右衛門ハ家内不殘殺シテ後自殺シ、
船田後室モ自害ヲシテ由ル、徳島藩ニ動搖セラル上記ノ向題ハ本件ニ關係ノ問題ナシ。

一、使者扱、諸生扱ノ件 (今三年七月十三日及議)

一、献金ノ議 高松藩提督 (今三年七月廿日)

一、海賊取締ノ議 (今三年八月八日)

一、海賊防禦ノ事 多度津海軍隊 (今三年八月十日)

一、驛場等ノ議 (今三年八月十日、全月十日(未定))

一、藩領除地ノ議 (今三年八月日不詳)

参考 明治二年正月土佐藩主山内豊範ハ薩長肥三藩主ト聯盟シテ木戸存允が提唱
ル藩籍奉還ノ建白ヲナシタ、今三年六月七日朝廷ハ右ノ議ヲ嘉加御アラマシ、次テ各藩主ヲ

藩知事ニ任命シタ。

一、廢藩置縣ノ件 (年月日不詳)

参考 明治四年七月、至リ廢藩置縣ノ詔が発ス。

一、銀券ノ事 (年月日不詳)

其他別子銅山ノ件、水論和解仲裁、境界爭論、裁決、各地探索報
告等ハ其一斑ニテ猶も澤山ニ見テモ、有ツタテアラリガ、未ダ十分ニ其
資料ヲ得ナイノハ残念ナル。

此ノ會議ヲ海賊ノ取締ヤ防禦ノ事ヲ議シテ居ルガ、當時四國沿海ノ地ヤ

其近海ニ海賊ガ横行シテ居タ様デアレ、而シテ會ノ變議ニ依ッテ明治三

年十月ニ海賊取締出張所ヲ四國ノ沿海地二十数ヶ所ニ設置スルコトニ

ナシタ、即チ新谷藩一ヶ所、大洲藩三ヶ所、松山藩二ヶ所、吉田藩二ヶ所、西條

藩一ヶ所、今治藩一ヶ所、多度津藩一ヶ所、高松藩三ヶ所、丸龜藩二ヶ所、

高知藩三ヶ所、同預リ所三ヶ所川之江、桑村、外ヶ所、徳島数ヶ所、宇和島数ヶ所

以上計二十ヶ所、實數不明、而藩各数ヶ所ノ海賊取締役人ノ出張所ガ出来タ。

各藩ニ於テ研究又ハ取調べタキ事件ヲ四國會議ニ提案シ、會議調

査ノ結果確答ノ出来ルモノハ夫々回答シ、猶ハ研究調査ヲ要スベキモノハ

此ノ會ナリ、高知藩ナリガ研究調査ノ上回答シタ。一ニ、實例ヲアゲルト

明治三年八月朔日ニ高松藩出張ノ松崎駿藏一書、後ガ佛式教師扱方ニ

ツキ質問ガ出タ、會議デハ何等名案モ出ズ、高知藩出張役人ハ高知藩照

會ヲナシ、後日高知藩カラ之ニ回答シテ居ル。

又明治二年十月ノ大會議ノ際、小松藩ノ重役カラ土佐藩重役藤原藤弥久

馬本山只一郎ハ對シテ土佐ノ留學生ヲ出シタイガ御許シ下サルマイカトノ相

ガアツク。土佐ノ重役ハ之ヲ快諾シタ、ソノ年十二月小松藩士喜多川千

太郎、近藤久吉、武司勇記ノ三士ガ經學修業ノ為、来高シ、暫ク留學シ

テ後歸藩シタ。

参考 明治二年十二月八日 小松藩ヨリ書翰並ニ土佐藩ノ返翰

一筆啓上仕依時下寒冷之節各様彌沛安養可被成御勤奉賀至、奉存

依然者藩士喜多川千太郎、近藤久吉、武司勇記、長經學修業之志御座依、并兼

而金陵御會議之節被仰合之御趣意之有之 尊藩江御依頼申修業為
仕度以度一同推參為仕依周乍厄介様馬博士同様之取扱ヲ以御世話被
成下依儀備奉希依右所依頼可得貴意如斯御座依 恐惶謹言

一柳 殿 助 壽 靜 坊

喜多川 鑄 太郎 久 徵 劬

齊藤 弥久 馬 様
元山 只一郎 様

右ノ返書

御札致拜見候如仰寒冷之節各様御安康被成御勤仕依由敬賀之至
奉存依然ハ兼テ琴陵御會議之節市談人之趣之有之 尊藩博士三人終
學為修業當藩(市長)越被成弊藩士同様之扱ヲ以致市世話依様委曲

市面之趣致承知被入申念申義奉存依右市報為可得市意如此市座依

十二月八日

林 亀 吉

本山 只一郎

喜多川 鑄 太郎 様

一 柳 殿 介 様

明治三年五月德島藩ニ稲田騷擾起ツ夕時稲田事件本書既ニ大要ヲ参考欄ニ記シ全藩使者、

伴剛大夫 山内十寸ノ二士が来高シ今十五日使者ノ申啓ヲ終ヘテ高知ヲ發

是以今月十八日琴陵駐在ノ土佐出張藩士田岡小文ハ德島藩動搖ノ件ニ就キ

本藩庶宛委細ノ通知書ヲ發送シ夕。ソコデ今月廿四日土佐藩ハ弘田

久吾植村源次郎ニ命ジ阿州藩ニ遣ハシ稲田騷擾ニ付見舞ハシ夕即而

使、翌廿五日高知ヲ発シテ德島ニ至リ、巨細ヲ見聞シテ歸、應復命シタ。六月廿日ノ金陵會議ヲ德島藩内騷擾アルヲ以テ全藩ヲ援助スルノ議が出タノハ此ニ關係ノ事ト思ハル。

今年春以来吉田藩内ニモ農民ノ騷動が起リ全藩ノ相談モアリ高知藩ヨリ全藩界へ警備兵並諸役方ヲ派遣シテ全藩ノ為ノ大ニ助勢シタ。六月ニ漸ク鎮定シ、七月三日ニ全藩ノ飯岡大参事ガ高知藩政府、出頭シ、傳事廳小参事小坂忠右卫門ノ案内デ知事殿ニ面謁シ御禮言上ノ後、権大参事小南五郎が出テ挨拶ガアツタ。

参考、吉田藩飯岡大参事ハ高知ノ下町高家岡村繁十郎宅(当時諸藩重役御使者者ノ旅館)ニ投宿シタ。傳事廳小参事ノ小坂忠右卫門ガ全旅宿へ應接ニ辭四能遊シテ翌七月

一日藩廳へ出頭シ左ノ挨拶ヲシタ。翌四日ハ高知ヲ立ツテ毎事ノ帰藩シタ。

吉田藩知事ヨリ高知藩知事(口上)

嚴暑之候愈々御恭然被為入珍重御儀ニ奉存候春來管内農民沸騰ニ付テハ大参事衆迄本藩大参事御依頼申候所有之御管轄地御境上江諸役方を始馬車当ニ被遣候段承知ヒ仕、厚忝次第被存候此節鎮静相成候ニ付御挨拶且將來猶又亦依頼之儀以申使者ヒ仰進候事

別段ニ

昨春未琴陵御會議ニ付テハ早速津頼申使者可ヒ進ノ所涉一新之際藩制改革ニ藩人少ノ儀彼是遲延相成甚不本意ヒ存候此度右遲延且津依頼之儀ヒ仰進候事

78
右之趣大参事象権大参事象は、宜申達旨と申身依事。

右ニ對シ高知藩知事ノ返答

此度御使者を以、縷々御懇意之段、深辱存候と仰下依件々委細領承申候御依頼儀亦同様ニ申座候此旨知事殿に宜敷願度候 以上。

七月三日

（右ハ吉田藩記録ニ依ル）

明治三年八月松山藩ヨリ文武講習生高知藩ニ来ル。松山藩モ亦豫テ土佐藩

重役ニ懇請シテ留學生派遣ノ相談ヲナシタルコトアリシガ明治三年八月松山藩

ハ其藩士子弟数人ヲ文武講習生トシテ高知藩ニ遣シ、此亦暫ク留進シ

テ帰藩シタ。左ハ松山藩重役河東喜一郎ハ高知藩重役本山只一郎ガ送ソタ

返書テアル。

尊書拝閱仕候弥御清雅御奉職之旨奉抔喜候然者此度尊藩之諸子御来臨被下候得共文武教官共素ヨリ未熟ニテ御切憊之益モ無御座ト却テ赧顔之至ニ奉存候御分袂云々之趣御同情ニテ小生輩鹿々相消シ申候御烟察可被下候右御酬意方草僚如此御座候 頓首百拜

八月廿四日

本山只一郎

河東喜一郎様
梧下

神式葬儀扱方ニ付、明治三年九月ノ琴陵會議大會ニ於テ松山藩重役

野中宇門ヨリ質問アリシモ、当時未ダ佛式葬儀ニヨルモノ多ク維新後漸

ク神式ニ改ムルモ出テシト雖モ、何分全国的ニ佛式遵奉数百年ノ後ソウ

ケ儀式作法等各藩各人マテ、此ガ扱方ニ困リタル折柄トテ、名安示モ出

79

ス終ニ高知藩重役片岡健吉ハ高知藩ヲ豫テ取調中ニ身歸體上、全草
案ナリトモ御参考、供シ度キ旨ヲ述ベテ相別レタル事ガマツタ。

本會議ハ前記ノ如キ議事ト共、右ノ例示セルガ如キ諸般ノ調査研究ヲナシテ、會
議所ヲ仲介トシテ各列藩相互ニ内治外交ノ發達進歩ヲ圖リ、廢藩置縣ト
カ廢刀令發布ヲ上表シタリシテ、多大ノ實績ヲアゲテ居ル。

第十、金陵會議ト他諸藩トノ交渉

金陵會議（嚴格ニ云ハガ）が成立スル全國各藩ハ段々ト傳聞キ、言ヒ傳ヘテ
四國ガ一團トナツテ如何ナル事ヲ仕出カスダラウカト怪異ノ眼ヲ以テ
注意ニテ居タモノモ有ツタガ、段々ト其正體ガ明瞭ニナルニ伴レテ、二
ハ九州ヨリ北ハ盛岡ニ至ル迄ノ各藩ヨリ種々ノ名義ガ研究ヲ見學、或ハ授

助ヲ請フ為ニ金陵會議所ニ交々參集スルト云フ有様ニ立至ツタ、實ハ僅ナ
間デハアツタガ、日本ノ金陵會議所トシテ為ニ琴平ニ一段ノ殷賑ヲ加ヘタトイ
フコトデアル。當時ノ人ノ話ニヨルト十数日間隱密ニ琴平市内ニ潜伏シテ此
會議狀態ヲ探リ、出張人ノ行状ヲ調査タリシタ揚句ニ拙者何々藩ノ何某デ
此度云々鹿瓜ヲシク切ロ上テ月幹ニ面會ヲ求メノモアレバ、二十五日モ廿日モ滯
在シテ各藩出張人ト懇親ヲ結ビ種々ノコト研究シテ歸ルノモアリ、或ハ種々問
題ヲ出シテ互ニ胸襟ヲ開イテ大ニ議論ヲ闘ハニテ歸ルノモアツト相ナ、詳細ト事ハ
分ラヌガ他藩トノ關係ニツキ記録ニ徵ニテ一二ヲ次ニ示セバ

明治二年十月廿日、豊後國岡藩カテ来訪

81
全 月 廿一日、盛岡藩立川三助、以藤本林之助二人来訪

全年十二月五日 = 豊後國府内藩ノ者来訪

全年 月 十四日 = 雲州人来り議論ス

全年 月 十五日 = 駿州藩ノ奥田小八郎潛ニ琴平ニ来り探索中

全年 月 十六日 = 會議所へ右奥田小八郎来訪、續テ翌

明治三年正月迄奥田氏滞在シ
正月元日ハ上佐本陣ニ全人ヲ招キ御食迄至ス
正月中ニ全人辭去又月日不詳

全年 正月 四日 = 長州人未訪 七日ニ至リ、十日滞在中、
退去ノ月日不詳

全年 月 七日 = 松江藩士来訪 (暫ク滞在中)

全年 月 十日 = 岡山藩士本城新、来ル 琴陵ノ佛像ノコトニ付キ来

ル由 (委細ハ不詳、全月十九日ニ全人ヨリ會議所へ来状アリ也)
内容又不明

全年二月廿一日 = 長門藩人来ル

参考。明治三年正月四日、全二月廿一日ノ西度ニ長門藩人ノ来ルコトハ明記アルモ、何ノ為

ニ誰レガ来レルカ不明ナリ、正月四日ニ長門二人ニ數日間滞在セル様アル。当時長州

ニ暴徒起リ、山口藩ハ之ガ鎮撫掃蕩ニ力メ、主謀者ハ死刑ニ死シ、其他ハ流罪ニ宥自宅謹慎等

シ命シ由キ其暴徒中ニ大樂源太郎ナル者アリシガ、全人ノ手紙ノ中ニ以度ノ来リハ實ニ止テ得ガ

ル次第テ諸隊長官ノ措置當ヲ失シタルヨリ起リシモノデ、全百十ナリハ最早取返シモ六ヶニカラ

ク、云々今全志中私ノ外子出陣并郎外数人脱走シテ先生ノ御宅へ御伺スルカラ、

ドウカ御引接下サイモ、云々此ノ輩軍ハ四國十藩ノ會役所モ参ル考ノ様ニ見

ヘマス云々トアル、果シテ此等ノ人々ガ四國會議所来タガ、ドウカハ判明センガ、丁度ニ

月中ノ事デアルカラ、或ハ上記二回ノ長州人来ルトアルハ、太田源次郎一味ノ者デアツ

タカ知レシ、四國會後ノ事ハ防長回天史ニモ出テ居ルシ之へ訴へ出テ一味ノ潔白

ヲ説イタカモ知レシ以下宇野東風氏ヨリ贈ニタテ考テ資料ヲ示サウ

改訂肥後藩國事史料卷十(侯島討細川家編實奈)ニ曰ク

明治三年二月某日山口藩大樂源太郎諸生數名を鶴崎に派シ毛利到に窮

狀を訴へ援助を求めしむ

(鶴崎毛利文書)

拜啓先以御佳安被為在奉珍賀候千今禁錮此節に至九死一生の中罷

在候御憐察是祈然ハ弊藩の内訌諸隊長官措置失当より相起り最早

恢復六ヶ敷三千之兵士ハ釜鑊の中に在リ 皇國の大乱先自弊藩始候

誠に悲泣號哭の至盟國の様子定テ聽及可被遊候羊と奉存候小生共計畫

謀極扼腕切齒而已此輩も不得止棄父離母何も包足泣泰の情實を以

て拜趨仕候間御引接被下故廿藩の勢カハ難極候とも不屈不撓正氣を主張

往先の目的等吳々御指揮奉頼候也四國十三藩の會議所元も可参志

と相見候其外指揮を以て何れなりとも跋渉仕候様奉頼候別て頼り度事

は檄文に布座依是非先生之正筆を以て四海を感動仕らせ 白王國今日

の勢是非共和合従の外無之乎と奉愚考候此儀は此輩の口頭仕候

間内乱始末御聽取是祈兎船切迫不能稱縷萬々御諒察可被下依乍失

敬請家内様一宣布傳奉頼候時下春寒為國帛自珍專一奉存候

草々敬白
朝風再拜

冷咲老先生
函丈下

二白 先日拜趨之桑山生其外皆在釜鑊中亮之々々

東風按右冷咲とは毛利到、肥前領豊後國鶴崎人私塾を開き文武を誘

道一、又有終館の教職をりしもの、朝風は大樂源太郎のこと、此書日付な
 けれとも山口藩にては二月十一日に日恭徳を掃蕩し翌日各官吏の黜陟を行
 ひ日恭徳の巨魁を獄に投じ連累者に謹慎を命じたることあり、又二月(日不
 明)大樂源太郎が毛利到へ贈りたる書に昨冬十一月兵制変革の事あり今年正
 月日恭勤し二月十日迄の出事を詳報せしものあり、且大樂の弟山縣五郎
 等十数人脱れり毛利を便りて鶴崎に来ることあり、前後の事情を察し
 て前の凶書を二月中のことと推定したり。此の書を携へて毛利の家に向りし人
 名及此後の行動不明、毛利到が此書に答へたか如何、何れも碑記録等の
 存するものなし。東風先年毛利家に就きて到の子「莫」といふ仁より大樂
 の書翰をりとして展示されしを筆寫せしもの即ち朝風書也

備考、三月朔日山口藩暴徒千餘を赦し翌二日暴徒の頭立者三十餘人を死刑に
 処し其他入牢流刑及び自宅謹慎等を命ず、三月五日長州暴徒大樂源太郎

護送者の目を此切れて逃亡し後豊後鶴崎に至り有終館に投ず、

明治三年

三月二十日、佐賀藩ヨリ来訪セシ者、高知藩ニ向ヒテ琴平ヲ發足ス、

三月廿五日、秋田藩ノ吉成良助来訪

今年四月四日、豊後ノ木林藩ヨリ来訪

今年六月二日、久留米藩ヨリ稲葉十郎来り田岡小文ニ應接ス、

参考、他諸藩トノ交渉ハ猶大ニ研究調査ニ後日増補ヲ期スルコト、以テ左ニ当

時ノ各藩出張人宿所ヲ参考ニ記載シヤウ、

土佐藩ハ内所森屋喜太郎(旅宿業)及び其他、宮地彦三郎(当時八木彦三郎)等

川原塚茂太郎、島村壽郎、田岡小文等居リシトカアル。附記シテ置クガ、琴平ハ土佐ノ御預リ地デ、鎮撫所ガアツタ、宮地彦三郎ハ此御預所主任デ、鎮撫頭取ナドモツトノ一中隊計リノ土佐兵ヲ卒井テ居タ、土佐兵トハ云フモノノ多数ノ讚岐人ヲ又ヘテ居タ、此等ノ讚岐人ハ大佐天領地カニ採用編隊シタモノデアル。御預所長ノ宮地ヤ川原塚ハ會議ニ関係深イ人デアルカラ序ニ此事ヲモ記シタ。備幸旅館ニモ土佐代表役人が居タフガアル、此店ハ美好幸助ノ経営ガ、始終備幸旅館ニ好幸ハデ通シテ居タ。

松山藩ハ管納實ノ家ノ書院ヲ借リテ下宿シ居タ。此ノ家ハ金比羅金光院ノ家老職ヲ務メ家板ヲ琴平町字西山ニ在ツタ。長屋忠明、藤野進ナドガ此處ニ居タ。

今。治。藩。ハ。内。町。ノ。上。シ。吉。旅。館。ト。西。山。ノ。齋。藤。芳。助。ノ。家。ニ。ア。ツ。タ。よし吉ハ與嶋屋吉右衛門ノ経営デ今治代表也上邦五郎が宿泊申明治三年九月大會中一夜自刃シテ此宿デ相果タ。原因未詳。

齋藤家ハ金光院ノ茶道役デ此家ハ玉井八彌ガ家族連デ引越テ来テ居タ。高松藩ハ高松屋源兵衛ト云フ旅館ニ居タ、高松屋ハ今モ一坂ニ改ニ營業ニテ居シ。宇和島藩モ高松屋ニ居タ。丸亀藩ハ内町ノ森屋喜太郎方デ

多度津藩ハ西山ノ大塚徳兵衛方デ、此処ニ勝田周藏、野間某ノ二人が宿シテ居タ、大塚家ハ元金光院ノ御茶道役ノ家デアツタ。

第十一、金陵會議規則ヲ改ムルノ議ト

金陵會議所之廢止。

金陵會議ノ秋季大會ヲ明治三年九月癸丑ニ開キ其議場ニ於テ高知藩ヨリ左ノ議案ホヲ提出説明シテ贊成ヲ求メタ。

改金陵會規則議

凡内外ノ利害及政治ノ得失ヲ詳悉セン為メニ一會議所ヲ設ケ議アレバ必相圖リ動靜必相通知セントス是弊藩ノ願ニシテ諸君子是ニ應ズル所以ナリ嚮キニ藩屏ノ職ニ在ルヤ政治ノ體裁一範ニ出ルニ非ス時モ亦紛々今日ノ靜且穩ノ如クナラス其議スヘキ者亦多シ今ヤ郡縣ノ世トナリ天下治體一徹ニ出テ且天朝議院ヲ開キ大ニ衆言ヲ求ム有志ノ輩出テ獻言シテ可也夫金陵皇都ヲ去ル殆三百里今日

新ノ時ニ當リ三百里外ノ地ニ在テ相議シ以テ此ヲ天朝ニ奏セント欲數十日ヲ経サレハ達セズ其言既ニ後ルニ非レハ則亦終ニ空言ニ歸ス故ニ弊藩ノ意從前會議ノ體ヲ變シ四時ヲ以テ正權大參事相會シ藩政ノ得失ヲ相議シ動靜相通知スルニ如クハナシ其相會スルノ地西ハ則道後、東ハ則金陵兩地特ニ四國中ノ都會象人輻湊時時ヲ得ルニ於テ亦益ナキニ非ズ且莫クハ諸君子此意ヲ諒シ前日ノ轍ヲ變セシコトヲ欲ス

庚午九月

此ヨリ曩ニ高知藩ハ近時經費多端ニテ賦政漸ク困難トナリ賦政改革ノ必要ニ迫ラレ本年六七月頃ヨリ改革案ヲ立テ早速之ニ着手スルコトナソク。

9
四國會議ハ最早時勢モ進ミ郡縣ノ世トナリ、東京ニハ新ニ議院モ設ケラ
レ、各地ヨリ公議人ヲ出ス事トモナリ、三百里ニ距ツタ琴平ニ狹小ナ四國
大ニ、議會ヲ設置シ、始終出張員ヲ要スル必要モナク、近來漸次會議所ニ
関スル費用モ出高マリ行ク許リテ開設當時ト時勢モ違ヒ且ツ會議ノ放
果次第ニ減少シテ行ク様ニ感ガアル経費節減ハ先ツ此等ヨリ初ムベキアルト論
出テ、財政改革ノ任ニ当レル谷守部ト片岡健吉等ガ今年七月東京ヨリ帰
國ノ途中全廿四日ニ讚所琴平ヘ立寄ツテ一泊シ、其夜旅宿高知屋清太
衛門方ヘ金陵會議所出張ノ川原塚茂太郎ヲ呼寄セ、右次第ヲ述ベテ各藩
出張人ノ意見ヲモ聞キタキニ付キ、今夜其所ニ御招キ申シ度シ、此段御周
旋ニ預リ度イトノ依頼アリテ、川原塚ハ各藩ヘ照會セシモ、居合セン徳島ハ

93
内十寸、坂集之助、大洲ノ西谷名不詳、吉田ノ森 名不詳ノ四士ガ出席シタ。谷片岡ノ
西人ノ酒宴中ニ四國會議モ最早不必要ニナリタル理由ヲ説キ解散シ度キ旨ヲ
述べ賛成ヲ求メシモ、誰一人賛意ヲ表スルモノナク、議論百出ノ状態デアツタ。
宴中ハ高松山崎モ来リテ、谷片岡西氏ノ廃止論ニ大反対ニ激論シタ為
メ當夜ハ破談ニ終リ、谷片岡ノ二士先ツ退席シ、次ハ一同帰宿シタガ所謂吹キ
別デアツタ。翌廿五日例會ヲ開キ、徳島ノ坂氏ヨリ「知事様御存寄書」トイフモ
ノヲ出シ且ツ四國會議廢止ノ件ヲ詢ツタ。之ハ徳島ガ月幹ニ當ツテ居リテ昨
夜谷片岡西氏カラ高知屋清太知事ノ意見書ヲ渡サレ且ツ會議廢止ノ件ヲ協議ス
ル様ニト頼マレテ居タカラテアル。此日今治、丸龜、松山、西條ノ四藩欠席シ、残九
藩ハ出席シテ居タガ何レモ賛成セス各本藩ノ議ヲ纏メ回答セウトス事ヲ期

會シテ、谷片岡ニ氏、此日琴平ヲ發シ、
セ七日ニ高知ニ歸着シタ。 谷子爵ノ隈山詒謀録ニ

四國會議所ヲ琴平ニ設ケシ主旨ハ前ニ述ビ如クヤリシ人撰其人ヲ得
ズ、各藩人相會日々酒色ニ金錢ヲ消費シ國家ノ事ニ於テ、何ハ得ル所モ
ナク、大ニ目的ヲ誤リタレバ、政費節減ノ手始メトシテ此會自ヲ解散スルコ
トヲ東京ニテ板垣初ノ論シタレバ孰レモ同意ナリシヲ以テ、余ハ片岡
ト共ニ歸途金比羅ニ立寄り、四國諸藩ノ代表者ニ面會シテ解散スルヲ
發議セリ、然ルニ議論紛々トシテ一致スル能ハズ、終ニ余等兩人ハ弊者
ハ議已ニ決セルヲ以代表者ヲ引取テ令ムベント切言ニ破談ニテ別レ
歸國シ次テ歸國ヲ命セリトアル。

右ノ記事ヲ見ルト、當時ノ谷守部ノ議論ハ財政改革當事者トシテ極端ニ四國

會議ヲ放キ落シテ居ル、成程反對意見ヲ述ベル時ハヨク極端ニ其欠矣ヲ奉ゲルモ
ノテハアルガ、此ノ議論ハ之ヲ廢止セシガ為ニスル議論デ、會議所廢止ハ經費ヲ節
約センガ為ニスル廢止デアル。何トナレバ國家ノ事ニ於テ何ノ得ル所モナクトハ甚ダ過
酷ト言テアル。此ノ會議ハ相当效績ヲ奉ゲテ居ノデアル。又曰ク人撰其人ヲ得ズ、云々大ニ目
的ヲ誤リタレハ云々ト、然ルニ各藩ハ代表者ハ皆相当立派ト人物揃ヒテ當時憂國有
為ノ士ガ多ク、現ニ贈位ノ恩典ニ浴セルモノヤ、國事犯ニ問ハレシ名士モアリ、或ハ其後高
等官ヤ中等學校長トトナリシ人モアリト聞ク。彼ニ人撰其人ヲ得ズトスレハ夫レハ
當時ノ藩廳ノ失策デアル。四非ハ實ニ谷子トモ其一部ヲ負フベキデアル。從ツテ
大ニ目的ヲ誤ツタカモ知レン。併シ谷子ノ豫想シタ様ニ必ズ近キ將來ニ於テ
天下ハ又一乱レ乱レテ薩長ガ相争フハ必然ナリ其時土佐ハ軍艦艘ニ兵ヲ滿載

シテ直ニ大阪ニ向ヒ云々ト云フコトニナラナカッタ、從ツテ四國會議ヲ利
 用スル腹藝ハ大ニ目的が外レタ。谷子トシテハ、ソシテ言モ云ヘマイガ要スルニ此ノ記事
 ハ多少御手前味噌臭イ長ガアル。兎ニ毎、土佐藩ハ經費節約ニ又時勢進展
 ノ結果最早此會議所ヲ必要トセナイ事ニナッタ。藩議ハ廢止ニ決定シタカラ、此時
 他藩出張人達ニ對シテ「弊藩ハ議已ニ決セルヲ以代表者ヲ引取ラ令ムベシト」ト
 言シタ。

参考。片岡健吉日誌抄、明治三年七月廿二日、大阪出足紅葉賀船に乗込、全廿三日九島沖

リ凡亀ニ上陸止宿、廿四日、金陵泊リ、同廿五日、川ノ江泊リ、同廿六日、河口泊リ、同廿七日、高知着。

七月廿五日、金陵會議所例會ニ於テ此會議所廢止案、土佐藩ヨリ提案
 ニヨリ、上記ノ如ク議論紛々トシテ、設議ニ至ラズ、結果各藩廳へ請訓ヲ續

ヲトリシモ、未ダ其纏ノ付カ先ニ中央政府ハ辯官ヲシテ土州藩ノ公議人ニ命ジテ、
 四國會議所ヲ解散セシメタ。但シ此ノ命令ハ八月廿八日デアツテ、此命令ハ九月ノ
 大會議迄ニハ未ダ各藩廳へハ移牒ニナツテ居ナイ位デ。高知藩ハ豫テ財政其他ノ
 關係ヲ會議所廢止案ヲ出シタガ仲々早速賛成モセズ、各藩議ノ纏リモ亦キ難
 イノデ、其係高知藩丈々引上ゲテ、後ハ知ラヌト云フ譯ニモ行カズ、困リテ居タ折柄、
 辯官ヨリ解散ノ命令ヲ受ケタカラ、渡リニ舟ノ塩梅ヲ、十月ノ秋季大會議ヲ深
 上ゲテ九月中旬トナシ、其會議へ土佐藩ハ例ノ片岡健吉ヲ派遣シテ、今度ハ政
 府ノ解散命令モアリ、又時勢カモ此會議所常設ノ必要ヲ認メナイカラ、此ノ
 會議所ハ今固限リ解散シ、今後金陵會規則ヲ改メテ、年四回位大参事又
 ハ権大参事ガ道後カ琴平ノ内ノ一地ニ集會シテ互ニ藩政得失ヲ議シ動情

相通知スル事ニシテハ如何トイフノテ上記ノ改金陵會規則議ヲ提案シ
夕。是ニ於テ各藩代表等モ朝命ヲ遵奉シテ琴陵會議所宛止ヲ満場一
致テ可決シ。金陵會規則改正ノ件ハ時節極正權大矣事ノ年四回集會日實
行困難トイフ事ニ決シ不定期ニ時折集會ト定メテ京條ヲ通シタ。然レモ
其後道後又ハ琴平テ四回重役ノ會合シタ事ヲ聞カン。時勢カモ大ニ衰リ突テ藩置
縣ガ實現セシレ中央ノ會議モ始マリ世態益々變遷シテ此ノ會議ノ違ガ無カク
デアロウ。

四國十三藩ノ金陵會議所ハ明治三年九月廿三日會議ハ十七日ヨリ
廿三日迄ニ週ニ廢止トキマリ。金
陵會モ事實上此時限リテ止マツタ譯デアル。各藩出張ノ人々ハ翌十月八日
迄ニ琴平ヲ引拂ツタ様子デアル。猶ホ會議解散命令當時ノ消息ニ付吉田

藩ノ武藤權少參事ヨリ其藩ハ差出セル書面ヲ左ニ示サウ。

昨春以來四州藩之琴陵ニ而會議有之候所此度朝廷ヨリ左ノ通御内

命有之候ニ付廢會相成且右ニ付於琴陵一同示談之紙面トモ差出ス。

八月廿八日土州公用人年官江御呼出、則罷出候知徳島公用人ニ

同時ニ呼出ニテ土方中辯中島中弁出張、土方ヨリ全日御呼出ノ儀

ハ於琴陵四國會ト唱ヘ 朝廷ノ為ニ集會致末候其主意者

徹致居候得共此頃戰爭モ止ミ先平定ト相成候上ハ右會議自今

取消申度此儘ニ參リ候而ハ九州ニモ又奥州ニモ同断ト申事ニ相

成候而ハ中ニハ如何之事ヲ議シ候程モ難計且於東京ハ議院ニ此

設置候ニ付 朝廷ハ盡ス事当地ニテ如何ヤウトモ出来可申ニ付

右之段無恙度及御違候間西藩ヨリ諸藩江相通候様御沙汰ノ事
 一、右琴陵會議廢止被仰出候処於東京土州藩板垣退助ヨリ十三
 藩公議人へ示談有之候ハ右ノ通廢會ト相成候ハ實ニ然候事件ニ
 者候得共未全リ平隱ト申時ニモ無之此上猶更親睦之道ハ相立
 申度各藩互ニ參事ノ内往來折々親睦旁出會藩政御相談モ申度
 ト申出候處各藩一同異存無之由

右之件ヲ以テ於琴陵モ益親睦之処亦折々參事藩江往來致
 可申トノ外無之ト一同決談之旨當月八日迄ニ各藩不殘琴陵引

拂候事

參考 四國會議解散ニ因聯シテ西京詰合ノ四國各藩役人集談ノ結果東京詰合

四國列藩公用人中江差遣シクル四章トガアル。

然者四州列藩議員御中仰集會之上〇〇表詰合の者以來廢會と決
 議之一條德島市藩ヨリ申報告ニ付当地ニ於テモ市各藩集議仕先處是
 迄迎々集會の有様ヲ寄り強而在京致居候次第ヲも無之ハ処所夏金
 陵ヨリ月幹之申兩藩登京ニ而乃形勢探索被致度旨被申聞儀得共
 其節ハ為指異件も無之候ニ付向後ハ当地探索ハ爰許詰合之者集會
 も有之旁飽迄探索其段報告可致旨約定ニ而金陵會議之一助ニ相
 成居申伏得共追々時勢變遷當今ニ至ツテハ御藩々々之御都合ヲ

101. 而卯番差置被成引拂相成ハ共聊集會ニ關係仕依義ハ此所迄依向
 在京之者全く懇親の為毎月一度十三日より相定會集致依段何止也

102.
申同意ニ付決議ニ相成申依当満月幹ニ付此段為報知如此ニ御座依

九月十九日

恐惶謹言

西京詰合

高松藩

吉田和一

松山藩

一井新吾

加藤庫助

四州御列藩御公用人中様

左記権右衛門

金陵會議一名四國會議

終

附録

金陵會議ニ関係人物中

板垣退助

名ハ正形、号ハ無形、土佐藩主山内氏ノ臣ニシテ、代禄三百石ヲ受ク、退助

ハ参政吉田元吉号ハ兼洋ノ拔擢ニテ免奉行トナリ、累進シテ容堂老侯ノ側用

トナリ、江戸藩邸ノ吏員ヲ總裁シ、常ニ容堂ノ為メ、枢機ニ参リ、献替スル所多シ

東山道先鋒

南来以藩政ノ枢機ニ参ス、明治元年、東山道先鋒参謀トナリ、東北征討ノ功大ナリ、明治二

年徴士參與ノ職ニ任ジ、全四年参議ニ任ズ、六年征韓論ヲ唱ヘ、議合バサルヲ

以テ官ヲ辞シ、後民権議院設立、國會開設等ノ運動ヲナス、全十四年自由党ヲ組

織シテ自ラ総理トナリ、尔来立憲政体ノ樹立、擁護ニ努ムルコト数年、全三十

三年見ル所アリテ、憲政党総理ヲ伊藤博文ニ譲リ、自ラ政界ヲ隱退シ、六事ヲ

社会日事業を盡力ス大正八年病ヲ患ズ之ヨリ皇親勲功ヨリ伯爵ヲ授ケテ
病危篤ノ旨天朝ニ達スルヤ特旨ヲ以テ從一位陸叙セシ。享年八十三。

片岡健吉

名ハ益光、後專之通称ヲ以テ行ル、家代々山内藩主ノ馬廻格ニ任シ禄百五十石
ヲ食ム、藩主山内豊範ノ小姓ヨリ累進シ郎奉行、参政加役兼帶トナリ明治
元年東征軍ニ從ヒ大軍監ニ任セラレ戦功アリ、凱旋后中老職ニ進ミ禄百石
ヲ加増セラル、次ハ藩参事トナリ、軍務係ニテ財政改革、兵制改革等ヲ以テ功アリ
四年朝命ヲ以テ海外ニ渡航シ、米英佛等ノ兵制ヲ視察シ五年歸ス全年
海軍中佐ニ任セラル、會々征韓論起リテ議合サル故ヲ以テ同志ト連結辞
職シ、尔来政黨ニ關係シテ民権議院設立ノ建白、議會開設請願書
捧呈等ヲナレ、方ヲ布教々化ニ盡力シテ立志社々長、縣會議長、衆議院

議員等ニ選バレテ聲望愈々高シ、明治三十一年第十二議會ヨリ衆議院ヲ以テ衆
議院議長ニ奉ケラレ、老練公平能クソノ職ヲ盡ス、徳望院内外ニ隆々ク、
全三十六年三月病ニ罹リ、歸縣療養ス、十月特正四位勲三等ニ叙セラレ十一月四
日病革リテ危篤ニ陥ルヤ天皇陛下ヨリ御菓子料若干ヲ下賜セラル、同日卒
ス、享年六十一、勅使末郎桑次料ヲ下賜セラル。

同屋友右衛門
名ハ長吉家、家代々土播主山内公ニ仕ヘ馬廻格ニ任ス、長吉家ハ明治初
年ニハ監察役タリ、全年小参事軍務局参務兼学校主務後諸役ヲ
経テ、職ヲ辞シ安貧業界ニ入り、高知國立第百廿七銀行頭取タリト云トモ

アリ、名ハ後由ラ長吉家ヲ用ユ。

桑原平八

初メ倉之進ト称ス、土佐藩士ニシテ勤王家ナル。

本山只一郎

名ハ茂任、初メ左近兵衛名ハ猛亥ト称シタ。次デ只一郎ト改メ晩年ハ茂

任ヲ用ユ、家世々山内藩主ニ仕ヘ扈從格ニテ禄二百石ヲ給セラル、茂任長シテ

容堂ノ側扈從トナル。伏見役後錦旗ニ流ヲ藩主ニ賜ヒ松山高松ニ

藩征討ノ命アリ、茂任藩命ヲ受ケテ錦旗ヲ奉ジ國ニ歸ル、途中高松

征討軍ニ會シ、錦旗ヲ總督深尾丹波ニ授ケ、進シテ豫房久万山ニ到

リ藩ノ惣宰深尾帶刀ニ錦旗ヲ授ケ、次デ松山ニ入ル、松山城主恭順

ヲ表シ城ヲ出テ降伏謹頓ス、依テ平定後國ニ歸ル、全三年高知藩

権大参事ニ任ジ、四年十一月松山縣参事トナリ次デ茨木縣、水澤縣

等ノ権参事、司法省等ニ歴仕シ、全十年六月神職トナリ白峯、春日、加茂

御祖、大和、大神諸神社ノ宮司ニ歴仕シ明治廿年ニ病ニテ卒ス、享年六十二。

林勝兵衛

名ハ勝好、後專ラ勝好ト称ス。土佐藩士ニテ家代々馬廻格、禄五百五

十石ヲ領ス、明治維新後ハ藩吏トナリ、明治二年ニハ三等官少参事

軍務局参務タリ、後山内侯爵家ノ家扶トナリ、居テ東京ニ移セシ

ガ明治廿二年頃全家扶ヲ辞シテ歸縣シ、後病ニテ卒ス。

谷守部

後ノ名ハ干城、号ハ隈山、土佐藩儒谷茶山五世ノ孫ニシテ、安積良齋

安井息軒等ノ師事ス、歸リテ藩致道館助教トナル、明治元年戊辰

役ニ從軍シ、軍監トナリ、戦功アリ、全二年二月高知藩少参軍務

局参務トナル、全五年陸軍少将ニ任セラレ、十年ノ西南役ニハ熊本

鎮台司令長官トシテ孤城重圍ノ裡ニ在リテ奮闘苦戦能ク天下ノ

大勢ヲ支持シ得タルハ、實ニ不朽ノ偉勳ナリ、今十七年學習院長

ナリ、子爵ヲ授ケラル。尋テ農商務大臣トナリ、又貴族院議員ニ選

レ、各要職ヲ兼任シ、常ニ侃諤ノ議論ヲ以、時弊ヲ痛斥シ、院ノ内外

ニ徳ヲ高カリシガ、明治四十四年五月病テ薨ス、^時年七十五。

松下與膳 名ハ綱武、鳳兮ト稱ス、家代々土佐藩主山内氏ニ仕ヘ、其禄ヲ食ム、与膳

幼ヨリ文武ヲ劬シ、特ニ漢籍ノ造詣深ク、浪華警衛、住吉陣宮勤務、

ヲ経テ七人扶持廿五石ヲ給セラレ、次テ藩ニ歸リ、文館助教、致道館教授

ニ歷任ス、明治元年正月文館教授兼少監察軍備係ヲ命ゼレ、今二年二

月藩命ニヨリ四國列藩ヲ遊説シテ四國會議(金陵會議)開設ノ議ヲ纏

ム、次テ今年四月四國會議用係ヲ以テ藩ノ代表重役大監察高屋左兵衛

ニ從ヒ、讚品丸龜ニ出張シ會議ニ列ス。其後在國他藩應接役兼帶、三

等官文館教授、海南分校一等教師、高知中學校教諭兼幹事、高知師

範學校長心得、赤岡中學校長心得等ニ歷任ス、後老ヲ以テ職ヲ辞シ、大正

七年病テ卒ス、享年八十才。

乾作 七 高知甘藩士ニシテ勤王家ナリ、後名ヲ和民ト改ム。明治二年ニハ藩知

事府少參事ナリキ

小森守太郎 高知甘藩士ナリ、明治二年頃ハ第三等官軍艦司令兼監察ナ

リキ、
渡邊 孫久馬 後、齋藤利行ト全人、代々高知甘藩士ニテ禄百石ヲ食ム、孫久馬ハ少

壯文武ヲ勵ミ各上達スル所アリ、姓寛裕人ヲ容レ尤モ克杖アリ、藩主ノ所

側物頭、近習目附、軍備御用兼帶、仕置役等、累進、常ニ治績ヲ舉

グ、明治中興、後、新政府、仕へ漸次昇進シテ元老院議官ニ元、明治

十四年卒ス、享年六十、

中村觀一郎

名、好正、厚王ト号ス、通称ヲ貞一郎、觀一貫一、等ト称セリ、家世々山内氏、

仕へ禄二百石ヲ領ス、土佐藩ノ勤王家ナリ、維新ノ初、文監家ナリ、明治二

年川之江、民政局、勤務シ金陵會談ニ出席ス、後権ヲ参事、権参事

香川縣参事、石鏡縣参事、山利木縣出仕等、累進、歷任ス、尋テ辭職ス。

人トリ、明敏ニシテ材幹アリ、議論風發、懸河如シ、拾年西南ノ役ニ材有造、

畫策ニ與シ、舉兵ノ企アリ、銃器彈藥ノ購入ニ着手ス、已ニシテ事露レ、十一年五

月縛シ、就キ、禁獄ニ年、刑ニ処セラレ、翌年青森ニ獄死ス、享年三十六。

宮地彦三郎

八木彦三郎、宮地庫吉ト全人、名、貞雄、高知藩士、宮地大丞貞貞京二男

ナリ、勤王志厚ク、文久三年脱藩シ京坂ノ間ヲ奔走シ、王事ニ勤ム、慶應三

年海援隊ニ入隊シ、隊ノ文司長岡謙吉等ト隊務ヲ共ニス、坂本龍馬

ノ凶刃ニ歎ル、ヤ、會浪華ヨリ帰洛シテ、西隊長ノ最期ヲ見届ケ、

次ヲ同志陸奥陽之助、藤澤潤之助、岩村精一郎、高村京治一郎等復仇ノ

為メ畫策スル所アリ、終ニ同志十六人ト天満屋ニ三浦休太郎ヲ襲撃ス

其後海援隊其儘ヲ以テ豫讃天領地鎮撫ノ命ヲ受ケ、來、塩飽一揆

高松征討、^{等ニ從ヒテ}御預所、高知藩鎮撫所頭取、京都出張所詰、伊勢神宮

廳、度會縣等、歷仕シ、後官ヲ辭シテ歸郷ニ感スル所アリテ、小學教育ニ從

事スルコト三十余年間ニ及ブ、老ヲ以テ職ヲ辞シ暫ク閑居セシガ大正五
 年七八オヲ以テ卒ス。彦三郎資性温厚、無慾恬澹ナリ、唯至誠報國ヲ
 念トシ、清貧ニ安セリ、香川縣仲多度郡本島村鎮座大山祇神社ハ彦三郎
 等ノ靈ヲ祀レル十三神社ノ合祭モノナリ、蓋シ昔日治下ノ村民等ソノ遺徳ヲ
 追慕シテ小祠ヲ建立シ十三神社ト崇敬祭祀セシラ後ニ大山祇神社ニ合祭セ
 ルモノナリ（此神社ノ件ハ奉祀神職高倉石子三氏報告ヨリ）
 川原塚茂太郎
 名ハ重幸、高知藩士ニシテ武市半平太同盟ノ勤王家ナリ、明治元年軍
 務係徒目附ニテ北越征討軍ニ從ヒ功アリ、今幸七月金陵會議所語ヲ
 命ゼラレ次デ川之江民政官副参務トナリ引續イテ琴平ニ駐在ス、三年八月本
 藩ニ召歸サレ、四年権大属六年教部省出仕等ニ歷任シ、九年二月國事犯ノ

嫌疑ニテ東京警視廳ニ拘留中、病テ卒ス、

田關小文

名ハ正路、後正躬ト改ム。土佐藩士ニシテ武市半平太同盟勤王家ナ
 リ、幼ニシテ父ヲ失ヒ、専ラ母ノ教養ヲ受ク、文久三年武市瑞山等
 ノ獄ニ繫ガルヤ正躬同志セ九名ト共ニ薩廳ニ出頭シ、其幽囚
 ヲ解キ、同トコトヲ願ヒ面陳頻ニカム、明治二年ニ藩制改革ノ際拔
 擢セラレ、同十二月金陵會議所へ出張ヲ命ゼラル、今三年七月今出張
 シ免ゼラル、後土佐郡小高坂村々長（今高知市小高坂）ニトケラレ、燦ル途

績アリ、明治三十六年八月卒ス、時ニ年六十九、

島村祐四郎

名ハ雅薰、通称寿太郎、洲羊等ト称セリ、高知、新所田洲ノ入ル家代々
 郷士ニシテ裕福ナリ、武市半平太ノ妻ノ弟ナリ。性寛宏勤王ノ志厚ク

一族皆勤王ニツトム、祐四郎自ラ同志ノ為ニ資ヲ投シテ其其ヲ助ク然レ
氏常ニ沈重ニシテ用意息周到ナレハ武市ノ大獄ノ際モ其厄ヲ免カレ又明
治元年東北征討ニ從軍シテ功アリ、凱旋後若藩吏トナリ、全三年知事
府權少參事トナリ、金毘羅及川之江ニ出張勤務セシコトアリ、後官又辭

シテ閑居ス、明治六年十一月卒ス、年四十二、明治三十年七月生前ノ勤功ヲ追崇シ

テ五位ヲ贈ラル。

島村嘉壽郎

初、通條ヲ再之助ト云ヒ、名ハ再采、後ニ雅事ト改ム、高知若藩ノ郷士ニシテ新

町田淵ニ住ス、武市半平太ノ妻富子ノ叔父ナリ、鎗術ノ達人ニシテ世ニ
知ラル、半平太ヲ輔ケテ王事ニ勤ム、常ニ同志ノ為ニ家資ヲ投シテ之ヲ
助ケシ為ニ文久、三年九月獄ニ投セラレ、幽囚三年ニシテ罪ヲ赦サル、

直ニ京都若藩邸留守居ヲ命セラレ、明治二年金陵會議所へ出張ヲ

命セラレ、後若藩道縣後陸軍司志ニ少自ニ歴任シ、後辭職シテ國ニ歸

ル、明治十八年七月六十四オニテ卒ス、明治三十一年七月勤王ノ功ヨリ正

五位ヲ贈ラル。

及原讓

通條ハ助馬又介馬ト書ス、高知若藩幡多郡藤岡ノ郷士ナリ、文武兩道ニ

達シタル勤王家トナリ、戊辰ノ役ニ從軍シテ陸目附役タリ、明治二年

軍功ニヨリ擢ラレテ御留守居組トナリ、金陵會議所へ出張ヲ命セラ

ル、全三年軍務官軍曹トナリ、次テ大隊教頭兼公務人トナル、四年正

月東京郵會計刑法用係官祿五十五石ニ任セラレ、次テ高知若藩大屬、兵部

省出仕、兵部省出仕、其他諸官ニ歴任シ、遷卒總長ニ至リ、正七位ニ叙セル、

(附古)

在職中ニ病ヲ卒ス。

森脇唯次郎

名ハ重成、後惟一ト改ム。舊高知藩士ニシテ、明治維新後川之江民政局諸

金陵會議ニ出張、御預所出張員、丸龜縣大屬等ヲ歴仕ス

田手次郎太夫

(森脇唯次郎ノ名ハ高知藩誌ニハ高成トアルモ今ハ高知藩勤王人名録ニ見)

宇和島藩ノ上士ニシテ家世々船奉行ヲ勤メ、祿百二十二石ヲ給セラル

次郎太夫ハ当世藩中屈指ノ俊材ニシテ金陵會議ハ前後數回

出席セリ。

鈴木震吉

家世々宇和島藩ノ武術師範ヲ勤メ、中士ニテ四人扶持十俵ヲ給セラ

ル、震吉ハ勤王ノ志ニシテ慶應三年頃京師ニ於テ活動セリ、明治二

年四國會議ニ出張ヲ命ゼラレシコトアリ、後姓名ヲ改テ物部惺滿ト称シ

郡長ナド勤メシコトアリトイフ。

須藤但馬

宇和島藩ノ上士ニシテ、藩ノ枢機ニ關係シ、祿百二十二石ヲ受ケ居

リシ偉人ナリ、贈從四位勤王家林政十郎ナドハ此ノ人ノ指導ニシ

リ活動セルコト多シトイフ。

河原治左衛門

宇和島藩ノ上士ニシテ、祿百三十石ヲ給セラル、大監察タリシコトアリ、明治

二年四月朔日金陵會議ニ出張ノ命ヲ受ケシコトアリ。

上原郷介

宇和島藩ノ中士ニテ四人扶持十俵ヲ給セラル、明治二年四月十三日金

陵會議ニ出張ヲ命ゼラレタル人ナリ。

遠藤元行

宇和島藩ノ輕格ノ士ナレ、當時ノ英才ニシテ伊達侯御時家日記中ニ

此人ガ金陵會議ヨリ帰リ藩セシコトヲ記セリ。

附十五

川名謙藏

宇和島藩ノ中士ニシテ四人扶持十六俵ヲ給セラル、元治慶應ノ頃
周旋方ヲ勤務シ京都ハ勿論諸藩ニ往徠シテ外部トノ交渉ニ当
レル練達ノ士ナリキ。

不破忠次郎

後武衛ト改ム。宇和島藩ノ上士ニシテ禄百石ヲ受ク、大参事ニシテ
當事有名ナル人物ナリ。

加藤虎一郎

宇和島藩ノ中士ニシテ儒者ナリ、藩學ノ教授ヲ勤ム、後名ヲ自慊ト
稱ス、明治二年監獄系不破忠次郎、周旋方川名謙藏ト共ニ四國會議
ノ件ニ就キ藩ノ使者トナリ、土佐藩ヲ未訪セルコトアリ。

飯淵縫

初縫殿、後改メテ縫、更ニ貞幹ト改ム、吉田藩ノ家老職ニシテ、和漢ノ學
ニ通シ詩歌ヲヨクス、幕末ノ際藩主ノ佐幕論ヲ屢々諫争シテ聽

カレザリシガ、明治維新後ハ藩ノ大参事トナリ、四國會議ニ出張セリ、其風

采高雅ニシテ、辯論ニ長ゼシカバ、各藩ノ士、以テ小藩ニハ過ギタル

老臣ナリト稱揚セリトイフ、諸藩名士ニ交リ、就中高知藩人ニ

交友多ク、板垣退助トハ親交アリ、明治十年南隊ノ總帥トシテ

甲斐順宣

遙ニ西郷隆盛ノ拳兵ニ應ジ終ニ官ニ捕ヘラレタリ。

吉田藩ノ士ニシテ四國會議(金陵會議)ニ出張シタル人ナリ、

十余年前郷里ニ於テ病歿ス、

野中久徴

松山藩士ニシテ明治参年金陵會議(出張ヲ命セラレ、全藩大

参事鈴木重遠ニ副トシテ出張セリ、後司法判事、松山中學校長

等ヲ勤メシ人ナリ。

附十八
池上邦五郎

名ハ忠古、今治藩士ナリ、明治元年目附役ヨリ京都御留守居役

(公用人)トナリ、後大目附役、参政トナル、明治二年十一月八日権欠

参事トナル、全三年九月十二日 琴平ノ金陵會議へ出席ヲ命デ

ラレ、全十三日若免忠太ヲ召連レ出發ス、全十七日ヨリ會議ニ

出席中、一夜旅館ニ於テ自刃ス、原因其他詳細不明ナリ。

土肥大作

名ハ寛貞光、字ハ猛輝、詩香又ハ甲山ト號ス、凡亀藩士ニシテ勤王家

ナリ、性濶達慷慨氣節アリ、壯ニシテ穎悟、藩學正明館ノ句讀師

ニ補セラレ、安政四年自ラ乞フテ江戸ニ遊ビ、幕府ノ儒者羽倉

外記ニ從學シ、轉ジテ昌平學堂ニ入ル、常ニ白王室ノ衰頹ヲ慨キ

テ尊王ノ大義ヲ唱ヘ藩政ノ不振ヲ憂ヒ奮テ皇威挽回ヲ藩政

一洗ノ策ヲ講ズ、全六年正月帰藩シテ第六助實忠ト議リ、兄弟内外ニ在リ

テ國事ニ盡サンコトヲ誓ヒ七助ヲシテ藩ヲ脱シ草莽ノ志士中ニ投

セシメ、身自モ長長ノ高杉、品川、久阪、土州、中岡、清風、因州ノ河

田等博ク天下ノ志士ト交リ、藩ヲ奉ジテ王事ニ勤ムルヲ己ノ任トシ日

夜周旋盡カスル知アリ、遂ニ藩廳ハ幕府ノ嫌疑ヲ恐レテ俄然ハ賈

光ヲ高林小十郎ノ邸ニ幽閉ス、明治元年正月王政維新ニ際シ、凡

龜藩其幽閉ヲ解ク、幾モテ伏見ノ役後高松征討参謀トシテ高

松征討軍ニ加ハリテ功アリ、今年六月雇士ヲ以テ三河縣判縣事ニ

任セラレ、次テ丸亀藩徴士、全権大参事、同藩右東京公議人、兵部

省出仕、大蔵省出仕、新治縣参事等ニ歷任シテ各治績アリ、明治

215
350

昭和九年二月二十八日 印刷發行
昭和九年二月二十八日 印刷發行
昭和九年九月二十四日 第二版印刷
昭和九年九月二十九日 全行

著者

高知県香美郡立田村
宮地美 立成

印刷兼
發行者

高知市世帯屋町四六三番地
小嶋 拓 一二

發行所

高知市世帯屋町四六三番地
白洋書店

《非賣品》

(附七三)

方芳名 (順序不同)
川田瑞穂氏
西園寺源透氏
兵頭賢一氏
尾達義國氏
高橋彦之丞氏
玉田榮二郎氏
岡田唯吉氏
坂本章三氏
宇野東風氏
田所市太氏
豊川英吉氏
横田傳松氏
池上融氏
西川源次郎氏
篠崎甲子次郎氏

金陵會議 西國會議 附錄 終

